

い　し　か　わ　じょう　り  
石　川　条　里　遺　跡　(11)

－特別養護老人ホーム桜荘地点－

浅川扇状地遺跡群

ほ　ん　む　ら　ひがし　お　き  
本　村　東　沖　遺　跡　(3)

－サーバス上松地点－

浅川扇状地遺跡群

か　み　な　が　は　た  
上　長　烟　遺　跡

－長電建設上駒沢住宅地地点－

2005年10月

長　野　市　教　育　委　員　会

## 序

遺跡や遺物などの土地に埋蔵されている文化財は、郷土の成り立ちや文化を正しく理解する上で欠くことのできない貴重な遺産です。まさに「土地に刻まれた歴史」といわれる所以がここにあります。

現在長野市内では700箇所以上の遺跡が周知されています。こうした埋蔵文化財は、そのままの状態で地中に保存し、後世に伝えていくことが理想的な在り方です。しかし、現代社会においては、開発事業の影で破壊される運命をたどる埋蔵文化財が生じてしまうことも致し方ない現実となっております。そこで次第の策として発掘調査を行い、記録として後世に伝えていく手段がとられています。

ここに長野市の埋蔵文化財第111集として刊行いたします本書は、平成17年に実施した民間開発事業に伴う3遺跡の発掘調査報告書であります。各調査の規模は比較的小さなものであります。貴重な遺構・遺物が出土しています。その成果は、連綿と織られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました関係各位の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成17年10月

長野市教育委員会  
教育長 立岩 誠秀

## 例　　言

1 本書は、宅地造成等開発事業に伴って平成17年1～3月に実施した埋蔵文化財発掘調査3件に関する調査報告書である。各遺跡の発掘調査報告書を合冊とし、『長野市の埋蔵文化財』第111集として刊行するものである。

2 各遺跡の発掘調査は、長野市が各事業主体者からの委託を受け、埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づいて長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が実施した。事業主体及び「起因事業」は次のとおりである。

石川条里遺跡：社会福祉法人博仁会「特別養護老人ホーム桜荘増築」

本村東沖遺跡：株式会社穴吹工務店長野支店「サークルK上松新築」

上長畠遺跡：長電建設株式会社「長電建設上駒沢住宅地造成」

3 本書の編集及び執筆は各調査における調査員が担当し、各報告書の例言にその分担を記した。

4 遺構図中に示した座標・標高は平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）と、日本水準原点の標高に基づく。

5 遺構の名称として、堅穴住居=S B、溝=S D、土坑=S K、小穴=S Pという略号を用いた。

# いし かわ じょう り 石川条里遺跡 (11)

－特別養護老人ホーム桜荘地点－

2005年10月

長野市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は社会福祉法人博仁会による「特別養護老人ホーム桜荘増築工事」に伴い実施された石川条里遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、長野市篠ノ井二ツ柳字大当1535番1である。
- 3 発掘調査は長野市長と社会福祉法人博仁会理事長との間に締結された委託受託契約に基づき、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが担当した。調査体制については後記する。
- 4 調査は平成17年1月13日～21日に実施した。実施した調査面積は約90m<sup>2</sup>である。
- 5 本書の編集は矢口忠良・青木和明の指導のもと、森田利枝が担当した。なお、執筆分担は目次に明記した。

## 目　　次

I 調査経過	(風間)	II 調査地の位置と石川条里遺跡	(風間)
1 発掘調査に至る経過	1	1 調査地の位置	4
2 確認調査の実施とその結果	1	2 石川条里遺跡の既往調査成果と調査地	5
3 調査区の設定	2	III 調査成果	(森田)
4 発掘調査の経過	2	1 調査概要	7
5 調査体制	3	2 検出された遺構	8
		IV まとめ	13 (森田)

## 図版目次

図1 調査実施範囲概念図	2	図5 大型畦畔・粘土塊集積土壙断面図	8
図2 石川条里遺跡と周辺遺跡位置図	4	図6 検出遺構実測図	9・10
図3 調査位置図	6	図7 北壁断面図	12
図4 基本層序	7	図8 大型畦畔想定図	14

## 写真目次

写真1 確認調査実施状況	1	写真11 A区全景写真	9・10
写真2 試掘坑土層堆積状況	1	写真12 B区全景写真	9・10
写真3 調査風景(A区 20050114)	2	写真13 大型畦畔北壁断面	11
写真4 調査風景(A区 20050118)	2	写真14 大型畦畔と粘土塊集積	11
写真5 調査風景(A区 20050121)	3	写真15 凹凸のある水田面(B区)	12
写真6 調査参加者	3	写真16 凹凸のある水田面(A区)	12
写真7 調査地周辺空中写真	6	写真17 SD1 土壙断面	12
写真8 A区土層堆積状況	7	写真18 みこと川地点	13
写真9 B区土層堆積状況	7	写真19 市道地点	13
写真10 大型畦畔と粘土塊集積(北から)	8		

# I 調査経過

## 1 発掘調査に至る経過

起因事業である特別養護老人ホーム桜荘増築工事については、補助金事務を担当する長野市保健福祉部高齢者福祉課より事前照会があり、事業計画が把握された。建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「石川条里遺跡」の範囲内に該当し、近隣における既往調査の成果より埋蔵文化財の包蔵は確実と予測された。しかし、予定地に南接する桜ホーム建設時には試掘調査ならびに工事立会を実施したもの明確な遺構が確認されなかつたという経過を踏まえて、まずは試掘調査の実施による埋蔵文化財包蔵確認の必要性が生じた。試掘調査は事業計画が具体化した平成16年1月14日に実施している。試掘調査の結果、仁和四年（888年）に発生したとされる洪水砂層の直下に平安時代水田面が良好な状況で包蔵されていることが確認された。この所見に基づき、平成16年3月11日に第1回の保護協議を実施し、今後の提出書類や日程等の説明・確認を行った。文化財保護法に関わる書類の提出は以下のとおりである。

平成16年11月2日付 「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」を進呈する。

平成16年11月21日付 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」通知される。

この通知書に基づき、平成17年1月6日に関係者による最終協議を実施し、発掘調査実施に至っている。

## 2 確認調査の実施とその結果

確認調査は平成15年12月3日付で提出された試掘調査依頼書に基づき、平成16年1月14日に実施した。

試掘坑は増築予定地の北東端部1箇所を選定し、バックホー（0.1m<sup>3</sup>）により掘削し、試掘坑の土層断面観察によって埋蔵文化財の包蔵状況の確認を行った。

堆積土層は現地表下最大50cmまで攪拌を受けていたが、攪拌上下では良好な土層堆積が観察され、約50cmの厚さで堆積する砂層直下に青灰色粘土層が確認された。この砂層は仁和四年に発生したとされる洪水の堆積砂層に比定され、その直下に存在する青灰色粘土層は平安時代水田面である可能性が極めて高いと判断された。畦畔などは確認されなかつたが、長さ2mの試掘坑壁面ではこの水田想定面が途切れることなく存在し、周辺の調査成果を加味すると、洪水砂にバックされた平安時代水田が良好な状況で残存しているものと把握された。これにより、事業実施に先立ち発掘調査等の保護措置が必要との結論を得た。



写真1 確認調査実施状況



写真2 試掘坑土層堆積状況

### 3 調査区の設定

確認調査の成果からは、事業予定地全面に平安時代水田が残存している可能性が極めて高いと想定された。本来ならば建物建設予定部分全面が発掘調査の対象となるが、現在、入居ならびにディサービスを営む既存建物際の掘削は困難と判断され、既存建物から離れた建設予定地北側を横断するトレーンによる発掘調査とした。ただし、トレーンとはいって、造構確認面での一定面積の確保が望まれることから、最低2mの幅を確保するよう努めた。また、調査設定区内に桜が残ることから、桜以東をA区、桜以西をB区と分割して調査を実施している。この結果、調査面積は造構確認面でA区が約42m<sup>2</sup>、B区が約13m<sup>2</sup>、合計55m<sup>2</sup>である。なお、壁崩落防止のため、掘削面には傾斜を持たせたことから調査実施面積は約90m<sup>2</sup>となる。

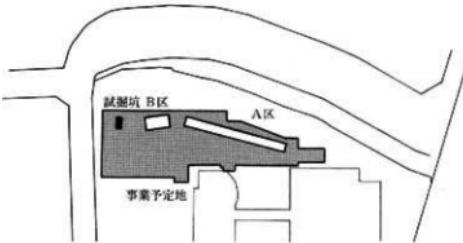


図1 調査実施範囲概念図

### 4 発掘調査の経過

現地における発掘調査は、平成17年1月13日に表土掘削作業に着手し、1月21日に現地におけるすべての作業を完了した。調査実施日数は表土掘削作業を含めて7日間である。

2005年（平成17年）

- 1月13日(木) 前日までの大雪による積雪を除去し、表土掘削作業に着手する。
- 1月14日(金) A区 造構検出作業着手。
- 1月17日(月) A区 大畦畔を確認する。
- 1月18日(火) A区 大畦畔東側の粘土集積を確認。
- 1月19日(水) A区 水田面の精査を行い、写真撮影。撮影後、コーディックシステムによる造構測量作業を実施。
- 1月20日(木) A区 実測  
B区 表土掘削作業着手。



写真3 調査風景（A区 20050114）



写真4 調査風景（A区 20050118）

1月21日(金) B区 水田面の精査を行い、写真撮影。撮影後、コーディックシステムによる造構測量作業を実施。  
作業完了後、器材を撤収し、現地における作業を完了する。

1月24日(月) B区 造構図作成。  
この後、図面ならびに写真整理作業を行う。  
平成17年度には、引き続き整理作業を実施し、本書刊行に至っている。



写真5 調査風景 (B区 20050121)



写真6 調査参加者

## 5 調査体制

本調査は調査依頼者である社会福祉法人博仁会理事長と長野市長とで締結した埋蔵文化財発掘調査委託受託契約に基づき、長野市教育委員会の直轄事業として文化財課埋蔵文化財センターが実施した。

組織・体制は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	立岩 隆秀
調査機関	長野市教育委員文化財課	課長	塙澤 一郎(日16) 北村真一郎(日17)
	文化財課埋蔵文化財センター	局主幹兼所長	矢口 忠良
庶務担当	係長 山岸恒雄(H16)	宮沢和雄(H17)	職員 吉村 久江
調査担当	係長 青木 和明		事務員 塚田 容子
	主査 飯島 哲也(H16)		専門員 山野井智子
	主査 風間 栄一(調査担当)		専門員 石丸 敦史(調査担当)
	主事(H16)主査(H17) 小林和子		専門員 小出 泰弘
	専門員 堀内 健次(H16)		専門員 森田 利枝(調査担当)
	専門員 清水 竜太		専門員 宮沢 浩司
	専門員 遠藤恵実子		専門員 山岸 千晃
	専門員 長瀬 出		専門員 加藤 拓也(H17)

発掘調査参加者 岸田武子 塙原恵美子 烏田卓也 中澤ヒデ子 福島幸子 松崎とみ子 山田令子

表土掘削業務 吉川建設株式会社 長野支店長 酒井 公

造構測量業務 株式会社写真測図研究所 代表取締役 杉本咲子

調査依頼者である社会福祉法人博仁会桜荘よりは休息施設の提供をはじめ、調査の実施へのご理解と多大なご協力を賜った。また、調査実施に至る協議の窓口であった第一設計株式会社、本体工事請負業者である吉川建設株式会社をはじめに関係各位より多大なご協力を賜ったことを明記し、謝意を表したい。

## II 調査地の位置と石川条里遺跡

### 1 調査地の位置

調査地は長野市篠ノ井二ツ柳字大當に所在する。篠ノ井駅にはほど近い環境から北に昭和園地、東にみこと川圃地が接し、住宅密集地と水田城との境をなす閑静な地である。

大当地籍における歴史的事象として、応永七年（1400年）に信濃国守護小笠原氏と信濃国人との間で激しい戦闘が繰り広げられた「大塔合戦」が知られている。この際に主戦場となった大塔城跡は本調査地の東側に想定されている。調査の実施にあたってはこの大塔城関連遺構の存在にも注意したが、該当時期の遺物の出土も認められず、城域は本地点まで広がっていないことが確認された。

また、大當はそのすべてが石川条里遺跡の想定範囲に含まれ、調査地の周囲には現在も水田が展開している。本調査地ももとは水田であり、調査区の壁面における土層堆積状況の観察より、近現代の水田面が確認できている。仁和四年（888年）の洪水直後、一時的な断絶期間が認められるものの平安時代以来現在まで水田として継続利用されるという歴史的景観を残す地として極めて注目される。しかし、この景観がいつまで残るか、また、仁和洪水以後いつの時点で水田復旧がなされたか、こうした点の解明は将来に託された課題である。

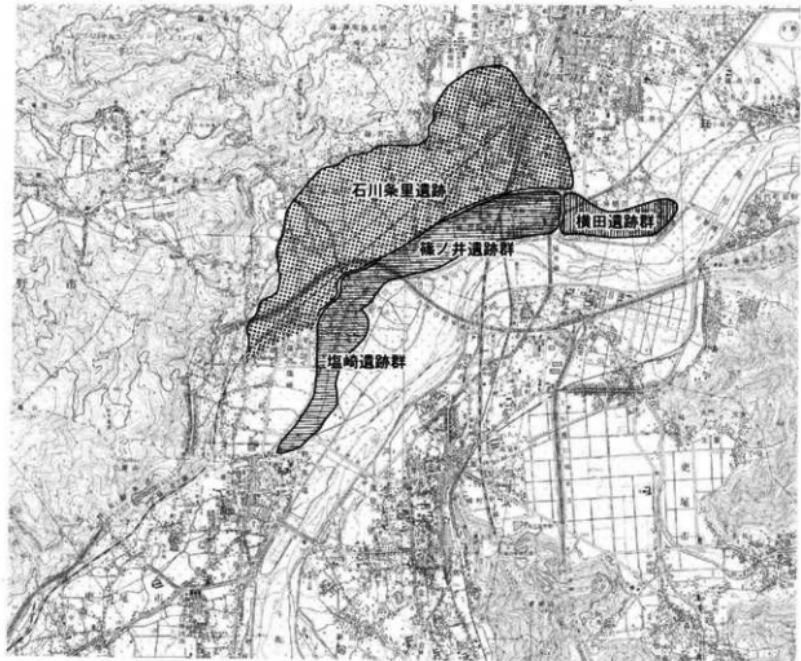


図2 石川条里遺跡と周辺遺跡位置図 (S=1/50000)

## 2 石川条里遺跡の既往調査成果と調査地

長野市篠ノ井の西部域には条里景観が広がり、千曲川対岸の更埴条里とも合わせると善光寺平南部には県内でも有数の条里景観が形成されている。この条里景観へは古くから注意が払われており、「上石川・下石川・方田部落の南方、平久保・山崎部落の北一帯の水田地域全城」に条里水田が広がり、旧造構が氾濫により埋没した後に再生された条里遺構であろう、と1978年には米山一政によって本格的な考察がなされている<sup>1)</sup>。

石川条里遺跡の発掘調査は、昭和57年度に実施された「川柳地区団体營圃場整備事業」に伴う確認調査を端緒に、長野市教育委員会ならびに長野県埋蔵文化財センターによって継続的に発掘調査が実施されている。この諸調査の結果、平安時代を主体とする条里水田が広く埋没していることが明らかにされている。

本調査地の近隣では、北野土地区画整理事業・県営住宅みこと川団地建設事業・市道篠ノ井南64号線道路改良事業・北陸新幹線建設事業などを起因事業とした発掘調査が実施されている。

北野土地区画整理事業<sup>2)</sup>では平安時代水田に伴う大畦畔・小畦畔・水口・水田面の耕起痕跡、中世の掘立柱建物跡・土坑・溝・煙作に伴うと見られる小穴が検出されている。大畦畔は東西方向、南北方向とともに確認されており、最大幅3m、最大高30cmと残存状況がよい。この大畦畔に接続する小畦畔も確認され、畦畔が断続する水口施設の存在も明らかとなり、水田構造を知る上で重要な知見を得ている。また、水田面は凹凸が少ない状況で確認され、休耕田の可能性や乾燥化の進行が指摘されている。

県営みこと川団地建設事業<sup>3)</sup>では平安時代水田に伴う大畦畔・小畦畔、中世の土坑・溝が確認されている。畦畔に併行した方向に水田面の凹凸が激しく、中には牛の蹄跡と見られるものも含まれ、凹凸が作付けに由来していることは確実である。この点、北野土地区画整理事業地点と対照的で、洪沢砂に埋没する直前期には北側水田の作付けが行われ、南側水田は休耕田であったと想定された所以である。また、南北方向の畦畔東側にはほぼ例外なく粘土塊の集積が認められている。

市道篠ノ井南64号線道路改良事業<sup>3)</sup>では南北方向の大畦畔・それと直行する小畦畔が検出されている。また、水田面からは足跡かとみられる凹凸も確認され、畦畔東側には粘土塊の集積が認められている。

北陸新幹線建設事業<sup>4)</sup>では小畦畔が確認され、県営みこと川団地建設地点での調査成果と合わせ、大畦畔による区画内部は小畦畔による半折型の区画分割が行われていた可能性が指摘されている。本調査地点東側に想定される大畦畔は攪拌によって検出されなかった。

また、調査地南側に隣接する医療法人博仁会桜ホーム建設時には試掘調査を実施のうえ、立会調査を行っている（試掘調査 平成13年7月13日実施）。基本的に洪沢砂とみられる砂層直下に青灰色粘土層の堆積が認められ、ここにも水田が広がっていたことは確実である。ただし、水田確認面は現地表面下最深で80cmと浅く、近代水田の影響を受けているため、畦畔等の確認はできなかった。特に、東西方向に想定される大畦畔は北陸新幹線地点同様にその存在は確認されず、後世の攪拌が水田面に与えた影響は少なくなかったものと把握された。

註

1) 米山一政 1978 「第五章第四節二 (二) 篠ノ井西部の条里遺構」『更級埴野地方誌』第二卷

2) 長野市教育委員会 1993 『石川条里遺跡 (7)』

3) 長野市教育委員会 1995 『塩崎遺跡群 (8) 石川条里遺跡 (9)』

4) (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4—長野市内その4—

篠ノ井遺跡群 石川条里遺跡 荘地遺跡 於下遺跡 今里遺跡』



写真7 調査地周辺空中写真（平成2年撮影）（株）ジャスティック



図3 調査位置図 (S=1/10000)

### III 調査成果

#### 1 調査概要

**調査方法** 今回の調査では、周辺の発掘調査の結果から平安時代埋没水田条里区画での1町四方を画する南北方向畦畔の検出が想定された。そのため、表土掘削は想定される遺構確認面より20cmほど上層（Ⅲ層 泥濁砂層）中に設定し、人力によって砂を除去し検出した。

**基本層序（図4）** 堆積土層は基本的に4層として把握でき、Ⅲ層（にぶい褐色砂層）下のⅣ層が水田面に該当する。Ⅳ層水田層は現地表下2m程まで堆積し、その下層は泥炭層となる。この基本層序は石川条里遺跡の各地点の状況とよく合致し、水田面を覆うⅡ・Ⅲ層などの地点でも確認されている。また、篠ノ井地区の発掘調査ではⅢ層に該当する堆積土層が広く認められ、埋没遺構の年代観より仁和四年に発生した千曲川の氾濫堆積に起因すると確実視できるようになっている。よって、検出された水田面は平安時代に該当すると判断できる。

**遺構・遺物** A区において畦畔1条・粘土塊集積・平安時代埋没水田面・平安時代以降の溝1条、B区において平安時代埋没水田面を確認した。これらに伴う遺物は出土していない。

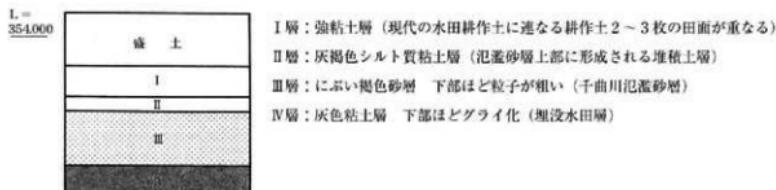


図4 基本層序



写真8 A区土層堆積状況



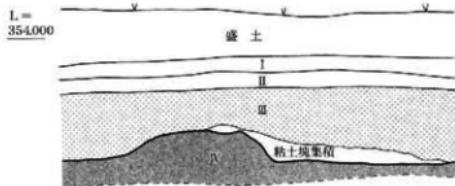
写真9 B区土層堆積状況

## 2 検出された遺構

**大型畦畔** A区で確認した。規模は幅120cm、水田面との比高差30cmで、断面半円形を呈する。主軸は真北から西へ約4°傾いた方向を示す。断面観察では畦畔を構築した土と水田面の土には差異は認められなかった。

これまでの調査成果からは多様な規模・形状の畦畔が確認され、それぞれ超大型畦畔・大型畦畔・小型畦畔に分類されている。今回確認された畦畔はこの分類の大型畦畔に該当する。調査当初から想定された1町を画する南北畦畔である。

**粘土塊集積** 大型畦畔の東側に幅100~150cmで帯状に検出した。粘土は灰白色を呈しシルトが混じる。氾濫によって流出した水田土壤の滞留である可能性が考えられる。同様な状況は、県営みこと川团地建設地点・北野土地地区画整理事業地点<sup>2)</sup>・市道篠ノ井南64号線地点<sup>3)</sup>で確認されていて、凹凸のある水田面ではほぼ例外なく認められる。



畦畔の東側に限定して堆積する状況は、氾濫の動態を復元する一要素として捉えることができよう。

図5 大型畦畔・粘土塊集積集積土層断面図



写真10 大畦畔と粘土塊集積 南から

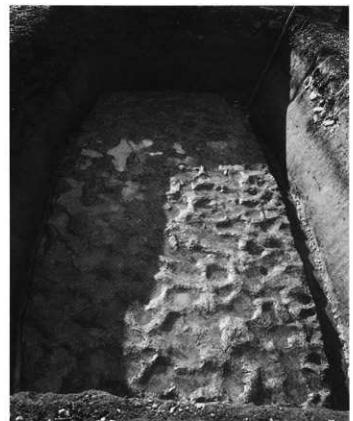


写真12 B区全景写真 東から

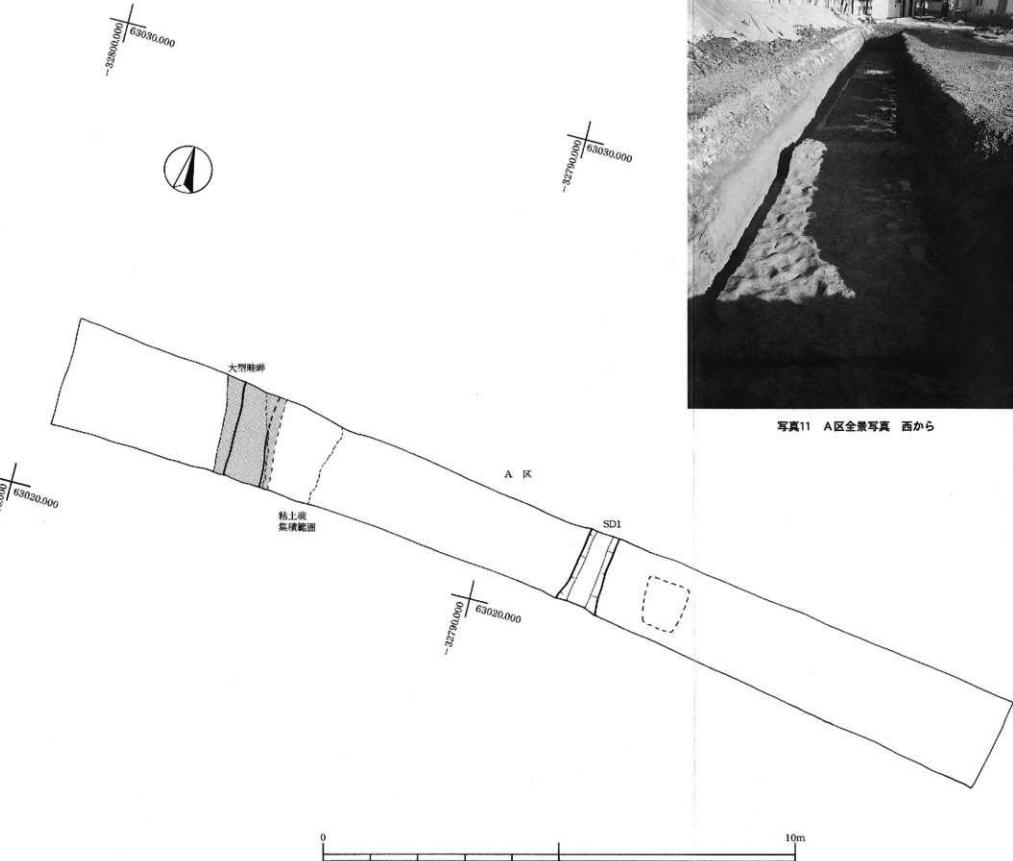
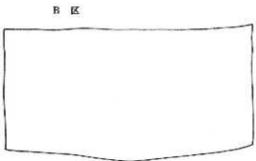


写真11 A区全景写真 西から



写真13 大型畦畔北壁断面



写真14 大型畦畔と粘土塊集積 北東から

**水田面** A・B区で確認した。氾濫砂と水田面の間は鉄分の沈着がみられ、ほぼ全面が10~30cmの不整形な凹凸面をなす。第6図中、ベタ部分のみ平坦であった。土質は灰色を呈する粘土で、水田面下100cmの厚さで堆積し下部ほどグライ化する。鉢床層を形成しない湿性の田であったと考えられる。

石川条里遺跡では、水田面から人の足跡・牛馬の蹄跡・鶴先の耕起痕などが埋みとして検出されている。今回の調査ではこれらの痕跡と合致する形状や、規則性を見い出すことはできなかった。



写真15・16 凹凸のある水田面（左：B区 右：A区）

**S D 1** A区で確認した。IV層で検出したため実際の平面形は不明だが、北壁断面で幅220cm、最深70cmを測る、南北方向に伸びる溝である。掘り込みはII層上面からIV層にまで達する。覆土は主に、粘土塊や砂を含むシルトの堆積で、II層に類似した土をブロック状に含む。最下層からモモ核が少量出土した。土器など遺物の出土がなく溝の構築および埋没年代の確定できないが、周辺調査の成果より中世の可能性が考えられる。

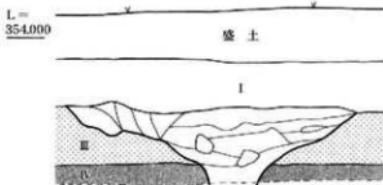


図7 北壁断面図 (1/40)

- 1)長野市教育委員会『石川条里遺跡(4)』  
1989
- 2)長野市教育委員会『石川条里遺跡(7)』  
1993
- 3)長野市教育委員会『塩崎遺跡群(8)』  
石川条里遺跡(9)』1995



写真17 北壁断面

## IV まとめ

当調査地点の調査結果は石川条里遺跡他地点の調査成果とよく合致し、復元された平安時代条里地割とも整合している。遺物の出土こそなかったが、1町（約109m）に区画された条里水田域が仁和四年の大洪水により埋没し、良好に遺存している事例を追加することができた。

なかでも、凹凸のある水田面、畦畔の東側に堆積した粘土塊集積は、県営みこと川圃地地点（以下みこと川地点）と市道篠ノ井4号線地点（以下市道地点）に顕著にみられる。青木和明は、みこと川地点及び北野土地区画整理事業地点（以下北野地点）での検出水田の状態を次の2種に類型化している。

① 水田面に凹凸が著しく、畦畔上面は平坦で断面台形、畦畔に取出水のための水口が多く設けられ、畦畔東側に粘土塊の集積がほぼ例外なく認められる。

② 水田面が平坦に近い。断面カマボコ形の畦畔、条をなして並列する耕起痕の範囲を一部伴う。

桜荘・みこと川・市道地点は①、北野地点は主に②に該当する。この2種は埋没時点での水田面の湿润乾燥の違いに起因するとし、①の水田面は湿润な軟弱面を呈し畦畔東側の粘土塊は氾濫時の渦流により移動した、水田面の浮遊性土壤である可能性を、②の水田面は乾燥状態にあり、水田として機能していない可能性（休耕を含む）を指摘している<sup>11)</sup>。

既往の発掘調査で確認されている平安時代氾濫砂層の分布、現在の千曲川河道から、氾濫流は当地の南北方向から押し寄せたと推定されるが、砂層の有無・厚薄は一様ではなく、広範囲におよぶ当遺跡の各地域によって受けた影響には差違があったと判断できる。湿润な水田面は、水勢の強弱、水流の方向を反映しやすいと考えられ、流出した浮遊性水田土壤（水田作土）の埋没後の状態を観察することは、氾濫の動態を理解する一つの指標になりうる。当地点においては、水田作土が粘土塊集積として検出される過程、すなわち、南北方向から移動した水田作土がどのようにして畦畔東側に集積したのか、主に自然科学の知見によって解決されるべき課題である。

南北約4km、東西1kmに広がる条里遺跡全体に同一の企画にもとづく地割が存在していたか、については以前から疑問視されてきた。（財）長野県埋蔵文化財センターが行った高速道地点での発掘調査をもとに復元された条里地割<sup>21)</sup>では、高速道地点・川柳地点・平久保地点には共通地割が存在するが、図8に復元した遺跡北東部の条里地割とは東西南北の傾きを同じにしながら、南北畦畔が東に約1mずれる。このずれが施行時期、開発主体の違いにあるのか、地理的な制約によるものなのか、それぞれの企画範囲を確定していく必要がある。調査例の増加を待って検討したい。

1) 長野市教育委員会『石川条里遺跡（7）』1993

2) 長野県教育委員会『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条里遺跡』1997



写真18 みこと川地点

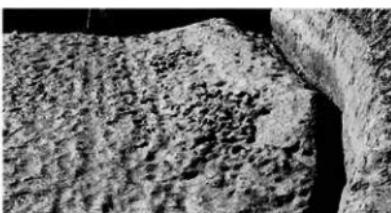


写真19 市道地点

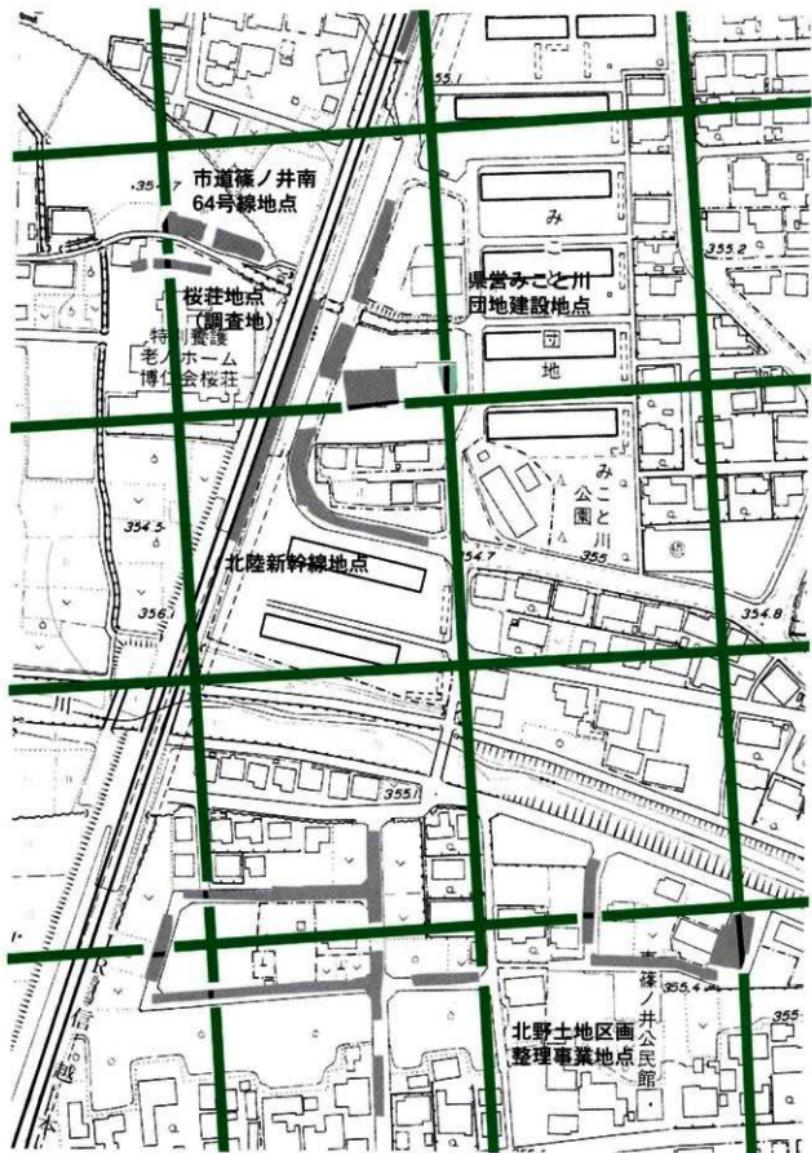


図8 大陸畔想定図

浅川扇状地遺跡群

ほんむらひがしおき  
**本村東沖遺跡(3)**

—サーバス上松地点—

2005年10月

長野市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、株式会社穴吹工務店「サーバス上松」新築工事に伴い実施した埋蔵文化財緊急発掘調査報告である。
- 2 発掘調査地は長野県長野市上松1丁目588番の2字本村南沖に所在する。字名は本村南沖であるが、以前発掘調査した本村東沖遺跡長野高校地点と近距離に位置することから、遺跡名は「本村東沖遺跡サーバス上松地点」とした。なお、遺跡の略記号は「A H H O III」としてある。
- 3 発掘調査は青木、遠藤、小出が実施し、本書の編集・執筆は小出が担当した。
- 4 造構図は発掘調査現地にて1:20の縮尺で作成したものを原図とし、本書では1:80ないしは1:40の縮尺で掲載した。なお、図中の網掛けは焼土の範囲を示す。
- 5 遺物図は原寸大で実測し、本書では1:4ないしは1:3の縮尺で提示した。土器は口径または底径が3分の1以上残存するものを中心に図化した。なお、図中の網掛けは、赤彩、焦げ痕、煤の付着、黒色処理を示す。

## 目　　次

例言・目次	
I 調査経過	1
1 調査に至る経過	
2 発掘調査日誌	
3 調査体制	
II 遺跡の立地と環境	5
1 遺跡の立地	
2 遺跡周辺の環境	
III 調査成果	9
1 調査の概要	
2 弥生時代後期の造構と遺物	
3 平安時代の造構と遺物	
4 包含層・検出面出土遺物	
IV 結語	26
遺物観察表・造構一覧表・遺物写真	

# I 調査経過

## 1 調査に至る経過

調査地は、長野市上松1丁目588番の2に位置し、農林中央金庫上松ハイツの跡地にある。平成16年7月、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターは農林中央金庫より、農林中央金庫上松ハイツ売却に伴う埋蔵文化財確認調査の依頼を受けた。地籍は、周知の通り、「浅川扇状地遺跡群」の範囲内にあり、周辺地域の発掘調査成果からみても埋蔵文化財の包蔵が予想されたため、長野市埋蔵文化財センターは、翌8月に確認調査を実施した。敷地内の2箇所に試掘坑を設定して掘り下げた結果、地表下1.2ないしは1.5m付近で遺物包含層の堆積が認められ、埋蔵文化財包蔵地であることが確認された。このため、開発事業計画に際しては、埋蔵文化財の保護措置が必要になった。

平成16年9月、(株)穴吹工務店は、当該地に「サーバス上松」新築工事を計画した。これを受けて、当機関は事業主体者と埋蔵文化財の保護に関する協議を開始し、平成16年12月に長野市教育委員会宛に埋蔵文化財発掘調査依頼書が提出されるに至った。埋蔵文化財保護協議はその後も引き続き進められ、敷地面積2850m<sup>2</sup>中、埋蔵文化財が破壊される可能性がある建物建築面積約985m<sup>2</sup>について、記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。

発掘調査は平成17年3月3日から31日までの実質18日間にわたり実施した。調査後継続的に整理作業を進め、本報告書の刊行に至った。



図1 調査地位置図 (1:50000)

## 2 発掘調査日誌

3月3日（木）重機による表土除去をA区東南隅より開始する。

3月4日（金）A区の表土除去を継続する。

3月7日（月）A区1次検出面の遺構検出に着手する。溝、土坑、小穴を確認する。B区の表土除去を開始する。

3月8日（火）A区1次検出面の遺構検出を継続する。新たに溝、土坑、小穴を確認し、遺構掘削に移行する。B区の表土除去を継続する。

3月9日（水）A区1次検出面の遺構掘削を継続し、完掘後、写真撮影を行う。B区の表土除去を継続し、並行して遺構検出に着手する。堅穴住居跡、溝、土坑、小穴を確認し、遺構掘削に移る。

3月10日（木）A区1次検出面の遺構測量を実施する。B区の表土除去、遺構検出・掘削を継続する。

3月11日（金）B区の遺構掘削を継続する。午後は降雨のため、14時で作業中止とする。

3月14日（月）B区の遺構掘削を継続する。A区の表土除去に着手し、2次検出面を確認する。

3月15日（火）B区の遺構掘削を継続する。A区2次検出面の遺構検出に着手する。堅穴住居跡、土坑、小穴、河川跡らしき遺構を確認する。

3月16日（水）B区の遺構掘削をほぼ完了し、全景写真、および遺構個別写真的撮影に移行する。撮影終了後、掘り残したSB3の掘削を継続する。

3月17日（木）SB3の掘削途中であったが、B区の遺構測量を実施する。A区2次検出面の遺構掘削を開始する。

3月18日（金）調査担当者体調不良のため現場作業を中止する。



調査区より地附山を望む



A区表土除去の様子



A区1次検出面の遺構検出



A区1次検出面の遺構掘削

3月21日（月）B区の遺構図を作成する。

3月22日（火）A区2次検出面の遺構掘削を継続する。午後は降雨のため、現場作業を中止する。

3月23日（水）A区2次検出面河川跡、およびB区SB3の掘り残した部分について掘削を行う。

3月24日（木）SB4・5の掘削途中であったが、A区2次検出面の写真撮影を行う。

3月25日（金）降雨のため、作業中止とする。

3月28日（月）降雨のため、作業中止とする。

3月29日（火）A区SB4・5、B区SB3の掘削を継続する。

3月30日（水）遺構掘削を完了し、写真撮影後、A区2次検出面とB区SB3の測量を実施する。

3月31日（木）遺構図を作成し、調査完了とする。



A区2次検出面の調査



A区2次検出面 SB4・5の調査



B区の調査（南西から）



B区の調査（西から）



B区SB3の調査



B区遺構測量の様子

### 3 調査体制

埋蔵文化財の保護措置については、史跡等整備事業にかかる学術調査を長野市教育委員会文化財課が担当し、各種開発行為に伴う緊急調査は埋蔵文化財センターが担当している。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩睦秀
総括管理者	文化財課長	塙澤一郎（H16） 北村真一郎（H17）
統括責任者	局主幹兼埋蔵文化財センター所長	矢口忠良
庶務担当	係長	山岸恒雄（H16） 宮沢和雄（H17）
	職員	吉村久江
	事務員	塙田容子
調査担当	係長	青木和明（調査員）
	主査	飯島哲也（H16） 風間栄一 小林和子（H17）
	主事	小林和子（H16） 審野隆史（H17）
	専門員	堀内健次（H16） 清水竜太 達藤忠実子（調査員） 長瀬 出 山野井智子 石丸敦史 小出泰弘（調査員） 森田利枝 宮澤浩司 山岸千晃 加藤拓也（H17）

#### 発掘作業員

今村辰遠 倉島邦子 中澤秀子 畑山よしみ 村田定男 横田与志子 吉澤きよ江 和田五男

#### 整理調査員

青木善子 池田寛子 多羅沢美恵子 烏羽徳子 中巖章子 武藤信子 矢口栄子

#### 整理作業員

倉島敬子 小泉ひろ美 清水さゆり 関崎文子 富田景子 西尾千枝 三好明子 村松正子

#### 遺構測量委託

株式会社写真測図研究所

発掘調査の実施にあたり、株式会社穴吹工務店の関係諸氏、ならびに調査に参加していただいた作業員の皆様には多大な御尽力を賜りました。記して感謝申し上げます。

## II 遺跡の立地と環境

## 1 遺跡の立地

長野市上松地区は長野市中心市街地から北東約2.5kmの距離に位置する。北西ないしは西側に地附山を望み、地附山から流れた土砂が堆積した崖雑地および浅川扇状地扇尖部の西端付近に広がる。市街地化という面では昭和30年代以降住宅不足解消のため、湯谷団地・上松東団地といった住宅団地の造成が進められてきた地域であり、以前は桑畠や果樹園、水田が広がっていた農地のほとんどが現在では宅地化されている。

今回の発掘調査地は浅川扇状地扇央部の西端付近に所在する。また、調査地の南西から西側は、城山台地とそれに連なる地附山の崖錐地が広がり、地形図からは北西から南東方向に傾斜する様子が窺える。ただし、調査前の現況は盛土造成がなされており、標高398.3m前後を測る平坦な土地であった。北東200m程の距離には以前発掘調査された本村東沖遺跡長野高校地点がある。この遺跡では弥生時代後期および古墳時代中期から後期の住居群が見つかっており、今回の調査地も位置的にみて、何らかのつながりがあるものと予想された。



図2 調査地周辺の宇塊図（1:100000）



図3 調査地周辺の地形図（1：5000 大正15年測量・昭和27年修正）



図4 現在の調査地周辺の状況（1：5000 平成2年測量・平成8年修正・平成13年修正）

## 2 遺跡周辺の環境

飯綱山を水源とし、通称「浅川原口」を起点として長野盆地北部に流れ込んだ浅川は、北西から南東方向に流下し、長野市富竹付近で北東に向きを変え、千曲川と合流する。この流域には、浅川東条を扇頂部とする扇状地が広がり、これまでに数多くの遺跡が認められてきた。ここでは、今回の調査地が位置する上松地区とその周辺に所在する遺跡の概要を述べていくこととする。

### 松ノ木田遺跡

平成6年に長野高校第2グランド造成に伴う調査が実施され、縄文時代前期後半の竪穴住居跡17軒、中期後半の竪穴住居跡2軒等を検出した。平成7年には飯綱高原浅川道路改良事業に伴う調査が行われ、縄文時代後期の竪穴住居跡2軒等を確認した。なお、周辺の試掘調査の結果をふまえれば、浅川左岸の扇頂から扇央部にかけて東西約415m、南北約130mの遺跡範囲が想定され、縄文時代の居住域が断続的に営まれていたものと考えられる。(長野市教育委員会1996『松ノ木田遺跡』、長野市教育委員会1997『松ノ木田遺跡II』)

### 湯谷古墳群

昭和49年に湯谷東土地区画整理事業に伴う調査を実施し、径10m前後の円墳7基を確認した。出土遺物の様相からみて、古墳時代後期(6世紀末頃)から築造が開始され、7~8世紀初頭まで追葬が行われていたものと想定できる。なお、現在は2号古墳のみが公園地にとりこまれて保存されている。(長野市教育委員会1981『湯谷古墳群 長札山古墳群 駒沢新町遺跡』)

### 本村東沖遺跡上松東団地地点

平成6年に市営住宅上松東団地2号棟建設に伴う調査が実施された。縄文時代晩期の土坑1基、弥生時代後期の円形周溝墓3基・土坑木棺墓6基・土器棺墓1基のはか、古墳時代前期の竪穴住居跡7軒を確認している。(長野市教育委員会1995『本村東沖遺跡II』)

### 本村東沖遺跡長野高校地点

平成3年に長野高校校舎改築に伴う調査が実施され、弥生時代中期の竪穴住居跡3軒、後期の竪穴住居跡41軒・掘立柱建物跡1棟・土坑1基、古墳時代前期の竪穴住居跡2軒、中期後半から後期初頭の竪穴住居跡56軒、平安時代の竪穴住居跡1軒・掘立柱建物跡2棟等を確認した。弥生時代後期の住居跡は今回調査地となったサーバス上松地点でも検出されており、南北300mを超える居住域が想定できる。また、古墳時代中期から後期にかけての集落は、地附山古墳群の造営と軌を一にしており、古墳と集落の対応関係が看取できる。(長野市教育委員会1993『本村東沖遺跡』)

### 下字木遺跡

平成2年にはうずら幼稚園プール造成、ならびに国補公営住宅建設および関連事業に伴う調査が実施され、弥生時代後期の竪穴住居跡5軒、古墳時代前期から中期の竪穴住居跡12軒を検出した。(長野市教育委員会1991『栗田城跡 下字木遺跡 三輪遺跡(3)』)

### 地附山古墳群

地附山古墳群は標高710mの地附山山頂に立地する前方後方墳(全長39m)とその直下の丘陵地および傾斜地に位置する上池ノ平古墳群(1~6号墳)から成る。昭和60年に発生した地附山地滑り災害に伴う恒久対策事業の実施に先立って、昭和61年に調査が行われた。調査対象となったのは、事業によって削除を受ける上池ノ平1~5号墳である。径9mの円墳2基(4・5号墳)と径10m台の円墳3基(1・2・3号墳)で構成され、1号墳と5号墳では主体部に合掌形石室が認められた。造営時期については、山頂の前方後方墳が5世紀後半に構築

され、その後上池ノ平1・6号墳、続いて2・3号墳、さらには5・4号墳と造営が行われ、4号墳の構築年代は6世紀前半と想定されている。なお、前方後方墳は眼下に浅川扇状地を見ることができ、当該地の盟主的な古墳と考えられる。(長野市教育委員会1988「地附山古墳群」)

以上のとおり、繩文時代以降平安時代に至るまでの様々な遺跡が認められ、居住城や墓城が展開していたことが窺える。中世期以降について文献資料を援用すれば、「上松」という地名は戦国期に登場する。武田氏、その後上杉氏の所領となり、近世期には上松村として松代藩に属することとなる。村の中央を北国脇道が貫通し、『長野縣町村誌』によれば、「運輸便にして、薪炭乏しからず。」との記述があることから、交通の便は良好であったと考えられる。(長野県編1973『長野縣町村誌 北信篇(復刻版)』 「角川地名大辞典」編纂委員会1990『角川地名大辞典20長野県』)

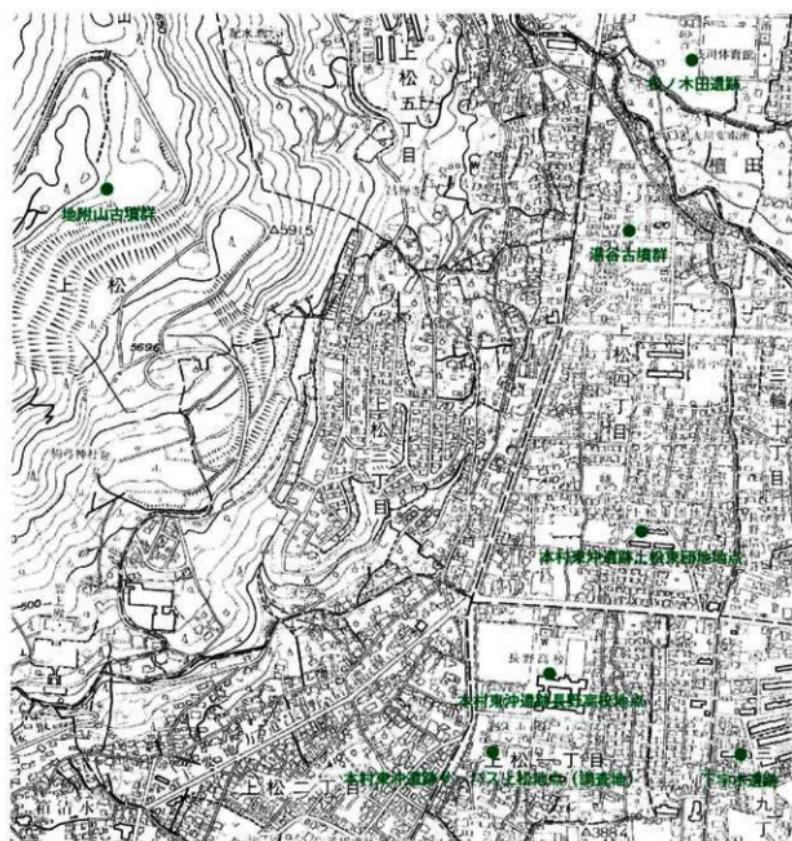


図5 周辺の遺跡分布（1:10000）

### III 調査成果

#### 1 調査の概要

##### 1 調査範囲

敷地面積2850m<sup>2</sup>中、埋蔵文化財保護対象地とされたのは建物建築面積約985m<sup>2</sup>である。ただし、実質的な調査面積は、旧建物（農林中央金庫上松ハイツ）による埋蔵文化財の破壊を免れた部分約450m<sup>2</sup>となった。調査区は東側と西側に分けられ、便宜的に前者をA区、後者をB区と呼称する。なお、調査面積はA区が約200m<sup>2</sup>、B区が約250m<sup>2</sup>である。

##### 2 基本土層と遺構分布

調査区内の土層堆積状況を把握するため、A区南壁2箇所およびB区南壁1箇所を部分的に記録し、土層柱状図を作成した。1層は盛土、2層は盛土以前の表土層に相応する。3層は遺物包含層、4層と5層は地山層である。盛土は最大で地表下1.1mの深さまで堆積している。地山層はa・b両地点では良好に確認され、B区からA区西半部にかけては安定した地形が広がっていたものと想定される。一方、c地点では地山層が確認できなかった。また、b地点からc地点にかけては地山層がなだらかに落ち込んでいく様子が看取され、A区東端部は窪地であったと考えられる。また、B区西半部では地山層に小石が多く含まれていた。

遺構は4層上面で検出した。また、A区では遺構の輪郭が不明瞭であったため、5層上面でも遺構検出を行った。便宜的に4層上面を1次検出面、5層上面を2次検出面としておく。A区東端部では河川跡とみられる遺構が広がりをみせる。一方、堅穴住居跡、溝、土坑といった他の遺構はB区からA区西半部にかけて展開しており、

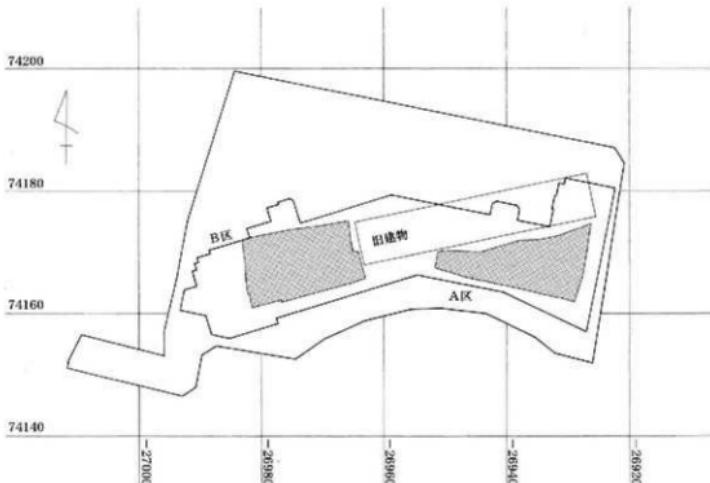


図6 調査範囲図 (1:800)

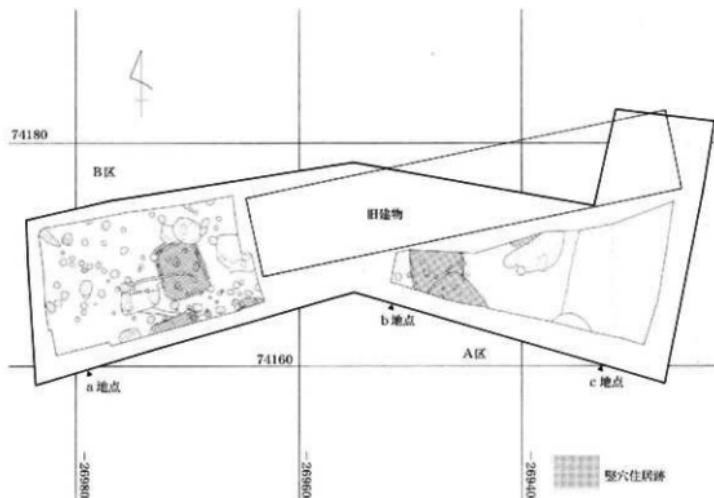


図7 造構分布図 (1:400)

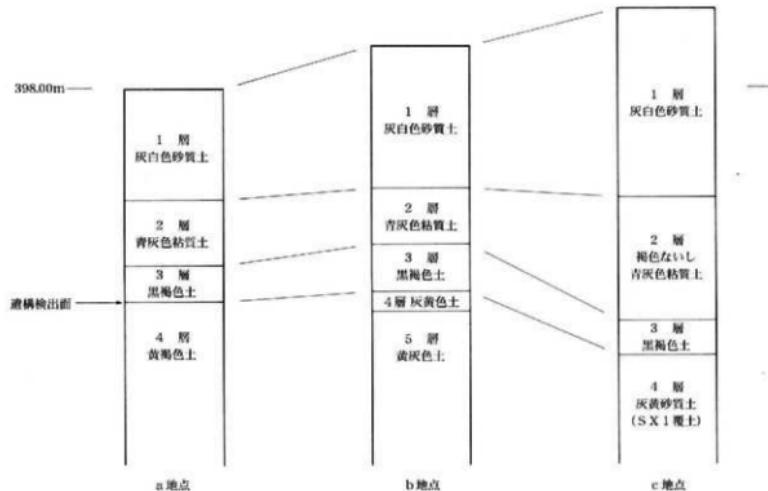


図8 基本土層柱状図 (1:30)



各地点における2～4層の堆積状況（左：a地点 中央：b地点 右：c地点）

地形の起伏が遺構分布に反映されているといえる。とりわけ、竪穴住居跡はB区西半部からA区東半部にまとまって検出され、東側の窪地と西側の小石を含む地山層を避けて分布する状況が窺える。以上より、住居構築に際して、土質条件や水はけの良好な場所が選定されていることが想定できる。

### 3 検出した遺構の概要

A区では、1次検出面で溝、土坑、小穴を、2次検出面で竪穴住居跡4軒、土坑、小穴、河川跡を確認した。B区では竪穴住居跡3軒、溝、土坑、小穴を検出した。なお、溝、土坑については、土層確認のため上手を残しながら掘削を進めた。

竪穴住居跡は弥生時代後期6軒（SB1・3・4・5・6・7）、平安時代1軒（SB2）である。弥生時代後期の竪穴住居跡は本村東沖跡長野高校地点の調査でも40軒以上検出されており、一連の集落域を形成するものと考えられる。SB3では床面上から器形が窺える状態で土器が出土しており、住居廃絶に伴って土器を廃棄した様子が看取できる。SB4・5では、調査時に湧水が著しかったが、床面から浮いた状態で多量の土器片が出土しており、住居の埋め戻し、あるいは住居が埋没する過程で遺棄されたものと考えられる。

溝は6条検出した。いずれも出土遺物が少なく、時期の比定は消極的である。SD1・3は南北方向に平行して走る溝である。平安時代（9世紀後半）の遺物が出土しており、該期の遺構と考えられる。また、SD4は周囲を土坑やSB2に切り込まれているものの、平安時代（9世紀後半）の遺物が認められている。

土坑と小穴は、総数130基余りを数える。遺構番号は遺物が出土した74基（SK25基、SP49基）に付した。出土遺物は破片資料が多く、時期が特定できない遺構が多いが、概ね弥生時代後期と平安時代の遺構が混在する様相を呈する。その多くは柱穴と考えられ、地形の傾斜に沿って北西方向から南東方向に列をなす状況が認められた。明確な掘立柱建物跡の復元には至らなかったが、その存在は十分に考えられる。また、土坑には不整形で規模が大きい掘り込みが幾つか認められる。SK23では、覆土中から多量の土器片が見つかっており、土器を一括して廃棄した状況が窺える。また、SK25では墨書き器、縁釉陶器の片等が出土しており、縁釉片の内面には陰刻花文が認められる。なお、包含層からも陰刻花文が施された縁釉陶器の段皿片が出土している。

河川跡（SX1・2）は、A区東側に広がり、東端に向かってなだらかに落ち込んでいく状況が窺える。遺構覆土は粘質土と砂質土が入り混じった土砂で構成され、直径10～20cm大の円錐を伴っていることから、流水の痕跡を示していると考えられる。川底の検出には至らなかったが、地形の傾斜から水流は北から南に下っていたものと想定される。出土遺物は、平安時代の土器片が大半を占める。



A区 1次検出面の溝・土坑・小穴群（東から）



A区 1次検出面の溝・土坑・小穴群（西から）



A区 2次検出面全景（東から）



A区 2次検出面全景（西から）



A区 2次検出面 S B 4 - 5（南から）



B区 遺景（北東から）



B区 全景（東から）



B区 全景（西から）



図9 A区1次検出面全体図 (1:100)

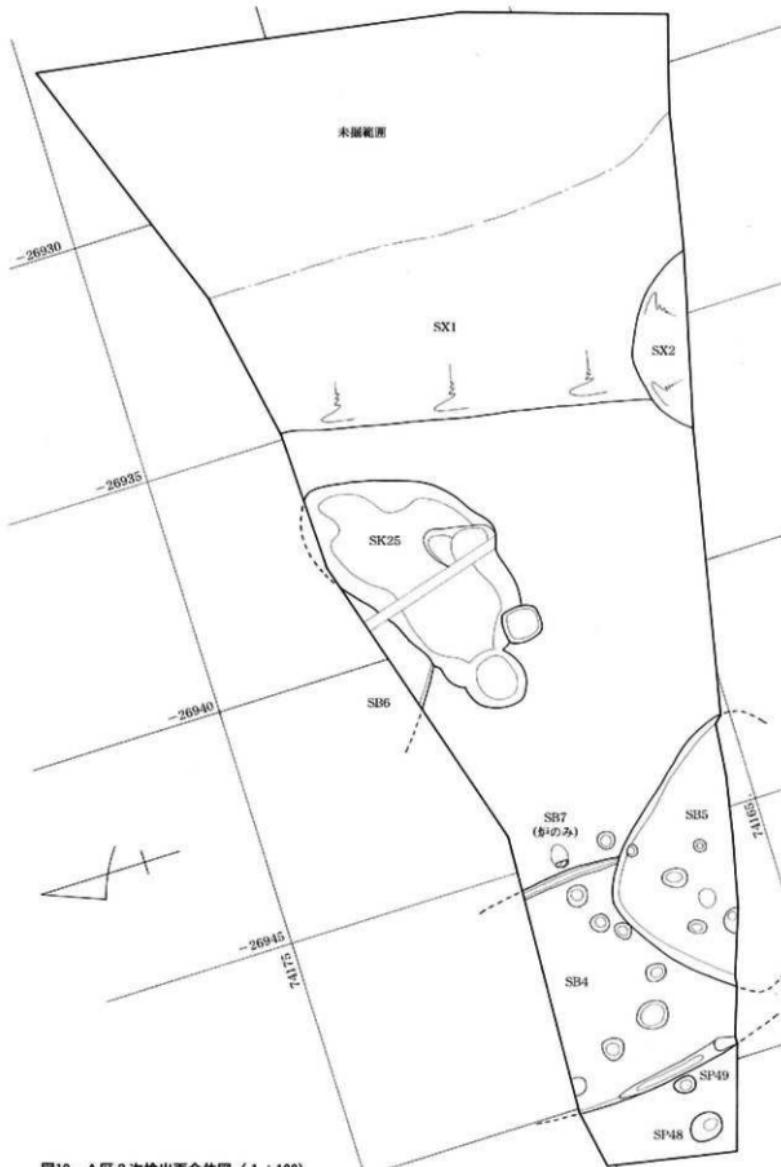


図10 A区2次換出面全体図 (1:100)



図11 B区全体図 (1 : 100)

## 2 弥生時代後期の遺構と遺物

### 1 窓穴住居跡

S B 1

B区南東隅で検出した遺構である。南側の大半が調査区外に延び、西側は土坑による破壊を受けていたため、遺構の平面形、規模は不明である。床面は黄色の貼床が認められた。



SB 1 (北から)

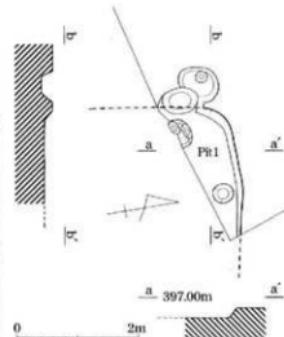


図12 SB 1 実測図 (1:80)

遺物は覆土およびPit 1から出土した。総出土量は460g、赤彩のある土器片は63gを測る。土器片から判別し得た器種は壺のみである。

S B 3

B区中央付近で検出した。他の遺構との重複による破壊が少なく、遺構全体を把握することができた。遺構の平面形は長軸約5.3m、短軸約4.2mを測る隅丸長方形で、主軸方位はN-18°-Wの傾きを示す。遺構覆土は炭化物混じりの灰色土である。床面は検出面からの深さ24cm前後を測る。黄褐色の貼床が認められ、中央部が堅く締まり、周辺部はやや軟弱であった。主柱穴はPit 2~4で、床面からの深さ44~60cmを測る。南壁際のPit 1・6は住居出入口に伴う掘り込みと想定される。周溝は南壁を除く壁際で確認できた。地床

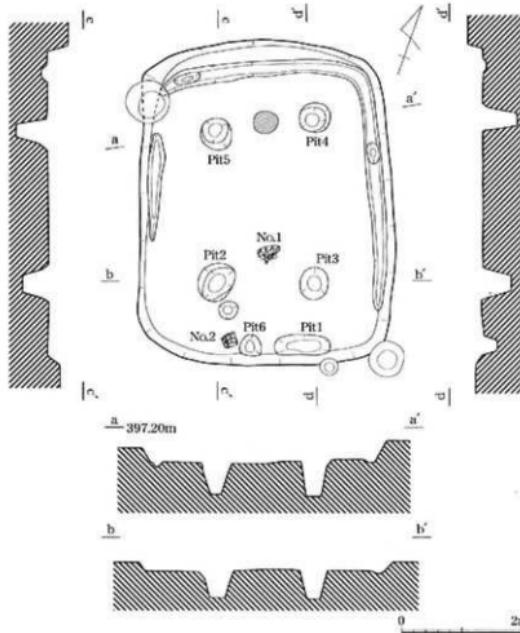
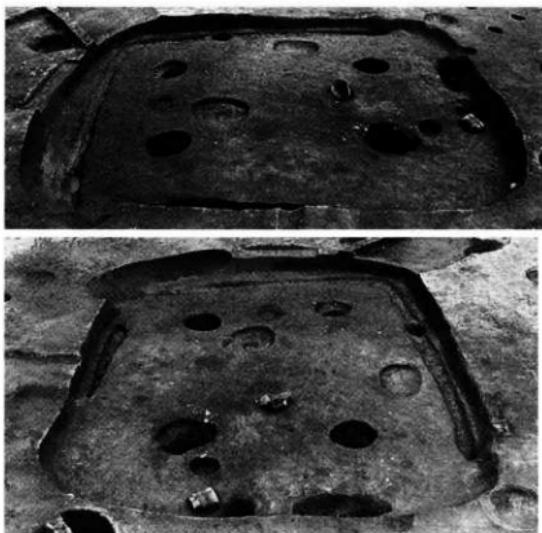


図13 SB 3 実測図 (1:80)

炉はPit 4・5の中間に位置し、赤褐色の焼土が広がっていた。

遺物は覆土、床面直上、Pit 1～5、周溝から出土した。床面直上からは器形が窺える状態で土器が出土している(No.1・2)。出土状況については写真とともに後述するが、住居廃絶に伴って、土器を廃棄あるいは投棄した様相を呈すると考えられる。総出土量は4845g、赤彩のある土器片は2356gを測る。土器片から判別しえた器種は壺、壺、鉢である。器形が窺える土器として壺(1・2)、鉢(3)、壺(4)を図示した。なお、北陸系土器として有段口縁壺の口縁部の破片が認められる。



S B 3 (上:西から 下:南から)



S B 3 床面直上土器No.1 出土状況

(上:南から 下:西から)

・住居中央部で出土した壺である。口縁部を北側に向かって横倒しの状態で出土した。胴部から底部にかけては残存しておらず、調査後の整理段階でも接合片は確認できなかった。

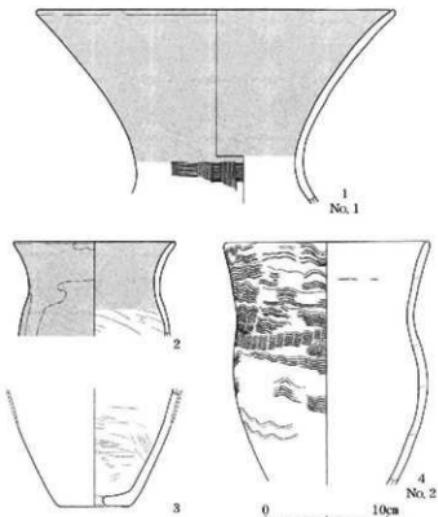
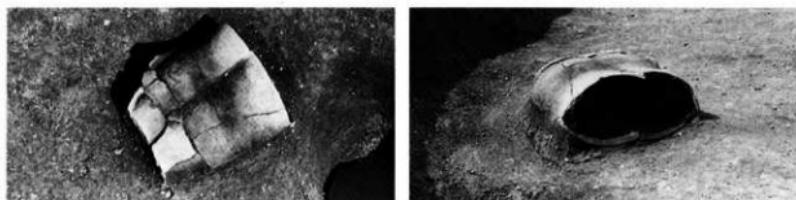


図14 S B 3 出土遺物実測図 (1:4)



SB 3 床面直上土器No.2 出土状況（左：南から 右：東から）

・住居南側で出土した壺である。口縁部を東側に向け、横倒しの状態で出土した。内部に土が詰まっていたため、住居埋設時に、土圧によって押しつぶされるのを免れたものと考えられる。底部は出土当初から欠損しており、調査後の整理段階でも見つかっていない。

#### SB 4・7

いずれもA区西寄りで検出した遺構である。

SB 7はSB 4の東側に位置し、地床炉を検出したのみである。地床炉には長さ26cm程の炉縁石が認められ、焼土が広がっていた。住居の掘り込みは確認できず、平面形、規模等は不明である。ただし、SB 4との位置関係から考えて、SB 4に先行する住居であったと推測される。

SB 4は北側と南側が調査区外にあたり、また、南側はSB 5によって破壊されているため、遺構平面形、規模は不明である。ただし、検出した東西の壁面から、短軸は約4.8mを測る。主軸は北西方向で、N-7°-Wの傾きを示す。遺構覆土は灰色土で、炭化物が混じる。

床面は検出面からの深さ最大で

16cmを測る。黄褐色の貼床が認められ、中央部は堅く締まり、周辺部はやや軟弱であった。床面で検出したPitの多くは掘り込みが浅く、その配置からも主柱穴とは考え難い。周溝は東西の壁際で認められた。地床炉は確認できず、調査区外に存在するものと考えられる。

遺物は覆土中、床面から浮いた状態で出土した。ある程度器形が窺える土器片が含まれてい

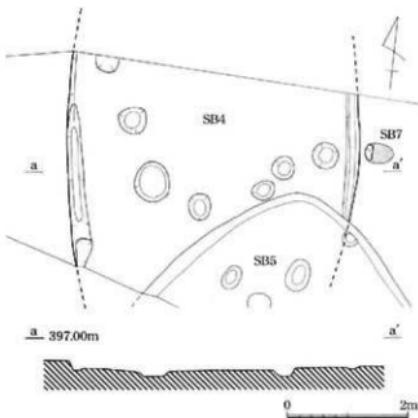
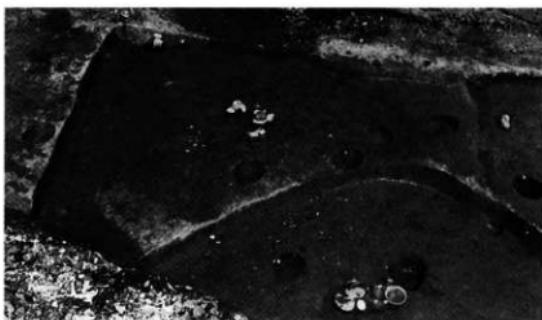
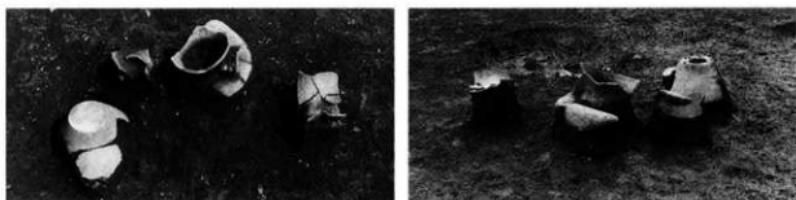


図15 SB 4・7 実測図 (1:80)



SB 4・7 (南から)

ことから、住居の埋め戻し、あるいは住居が埋没する過程で、破損した土器を遺棄した状況が想定できる。総出土量は2520 g、赤彩のある土器片は1071 gを測る。土器片から判別し得た器種は壺、壺、高杯である。器形が窺える土器として、壺（1）と壺（2・3）を図示した。3は内面に使用痕跡とみられる薄い焦げ痕をとどめている。また、図示できなかったが、高杯の破片には北陸系土器とみられる、柱状脚部片が認められた。ただし、赤彩が施されており、在地化した様相が窺える資料である。



SB 4 遺物出土状況（左：西から 右：東から）

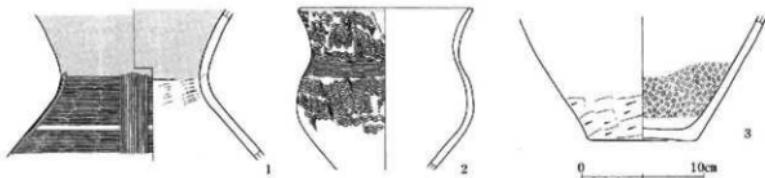


図16 SB 4 出土遺物実測図（1:4）

### SB 5

A区西寄りで検出した。北側はSB 4と重複関係にあるが、検出当初は遺構覆土の違いによる切り合いが不明瞭であった。このため、調査区南壁際に、試掘トレンチを設定して掘り進めたところ、SB 5がSB 4を切り込んでいる状況が確認できた。南側は調査区外に延びており、調査できた範囲は全体の半分程度にとどまる。遺構の平面形は隅丸長方形で、規模は推定で長軸5.1m、短軸4.2mを測る。遺構覆土は炭化物混じりの灰色土である。床面の深さは検出面から21cm前後を測る。黄橙色の貼床が認められ、中央部が堅く締まり、周辺部はやや軟弱であった。主柱穴はPit 2・3で、調査区外にこれらと対になる柱穴が存在するものと想定される。地床炉はPit 2・3の中間に位置しており、赤褐色の焼土が認められた。周溝は確認できなかった。

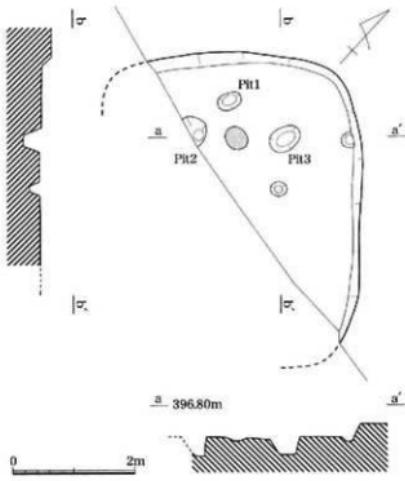


図17 SB 5 実測図（1:80）

遺物は覆土およびPit 1から出土している。とりわけ、床面から浮いた状態で多量の土器片が出土した。器形が窺える個体も含まれていることから、住居の埋め戻し、あるいは住居が埋没する過程で、完形品や破損品をまとめて遺棄したと考えられる。総出土量は16940g、赤彩のある土器片は8523gを測る。土器片から判別し得た器種は壺、壺、高杯、鉢である。器形が窺える土器は図示した14点で、内訳は壺6点、壺4点、高杯3点、鉢1点である。総出土量のおよそ8割を占めるところから、復元できた割合は大きいといえる。なお、覆土から出土した遺物については、床面の掘り込みが他遺構に比べて深く、出土量が多くかったため、上層と下層に分けて取り上げた。ただし、調査後の整理時には、両者の土器片が接合する場合も認められており、あくまでも便宜的な処置である。



S B 5 (南東から)



S B 5 覆土上層の遺物出土状況 (南東から)



S B 5 覆土下層の遺物出土状況 (北東から)

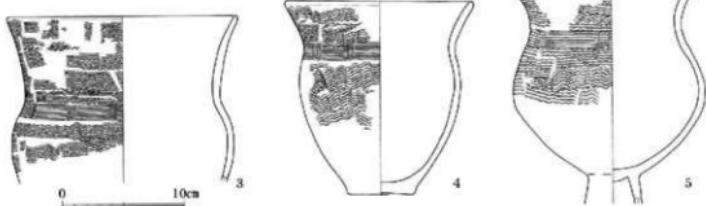


図18 S B 5 出土遺物実測図① (1 : 4)

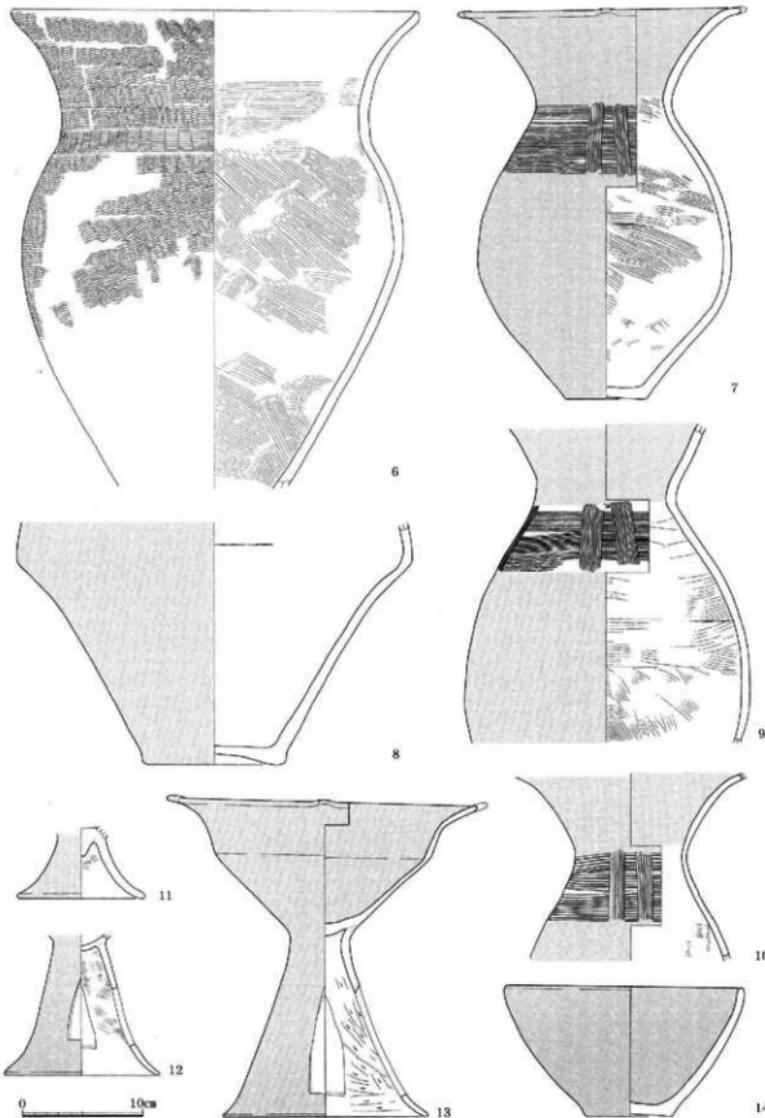


图19 S B 5出土遗物实测图② (1:4)

## S B 6

A区で検出した遺構である。北側の大半が調査区外に延びている。また、南側はSK25に破壊されており、遺構の平面形、規模は不明である。主軸方位は北西方向と推定され、N-55°-Wの傾きを示す。遺構覆土は炭化物混じりの灰色粘質土である。床面は検出面からの深さ12cmを測り、黄橙色の堅い貼床が広がっていた。主柱穴、周溝、地床炉は確認していない。

遺物は覆土から出土した。総重量は200g、赤彩のある土器片は98gを測る。土器片から判別し得た器種は壺のみで、その他の器種は判別できていない。石製品として、扁平片刃石斧が出土している。

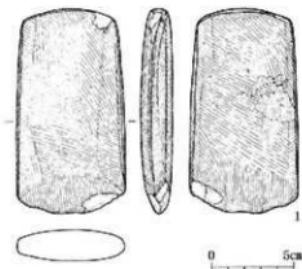


図21 S B 6 出土遺物実測図 (1 : 3)

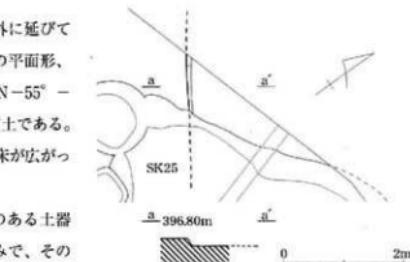


図20 S B 6 実測図 (1 : 80)



S B 6 (南東から)

## 2 土坑

### SK 5

A区中央付近で検出した遺構である。規模80×52cmを測る楕円形の掘り込みで、検出面からの深さは8cmを測る。完形に近い壺が出土したが、遺構の性格は不明である。

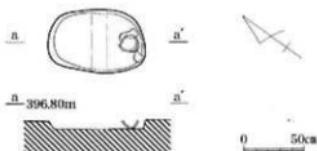


図22 SK 5 実測図 (1 : 40)

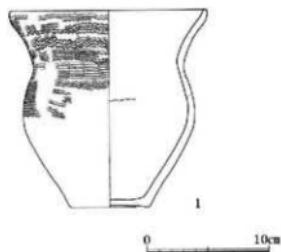


図23 SK 5 出土遺物実測図 (1 : 4)



SK 5 (西から)

### 3 平安時代の遺構と遺物

#### 1 窪穴住居跡

##### S B 2

B区で検出した。南側の大半が調査区外にあたるが、平面形は一辺4.2mの隅丸方形と推定される。主軸は北西方向でN-21°-Wの傾きを示す。床面は検出面からの深さ5cmを測り、軟弱である。

遺物は覆土から出土しており、総重量は1230gを測る。器種には黒色土器の壺、土師器の壺・甕、須恵器の蓋・壺・甕・瓶類のほか、灰釉陶器の瓶がある。器形が窺える土器は図示した土師器壺2点で、10世紀前半の所産と考えられる。なお、床面西側で検出した掘り込みからも同時期の遺物が出土している。

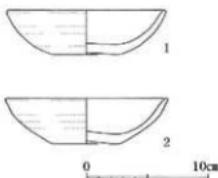


図25 SB 2出土遺物実測図 (1:4)

#### 2 土坑

##### S K 23

B区で検出した不整形の土坑である。規模は2.6×2.1m、掘り込みの深さは検出面から最大で24cmを測る。中央の小穴は別の掘り込みと考えられる。遺構覆土は炭化物混じりの黒色土である。

遺物は覆土に混じって多量に出土しており、土器をまとめて廃棄した様子が窺える。総重量は6160gを測る。土器片から判別し得た器種として、黒色土器の壺、土師器の壺・甕、須恵器の蓋・壺・甕・瓶類、灰釉陶器の瓶類が挙げられる。また、綠釉陶器、

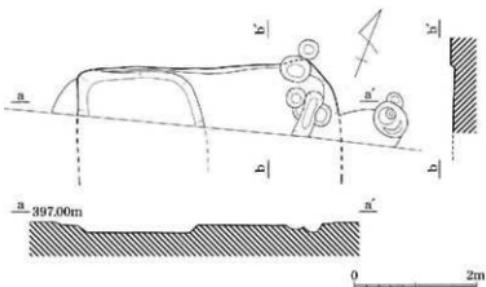


図24 SB 2実測図 (1:80)



SB 2 (北から)

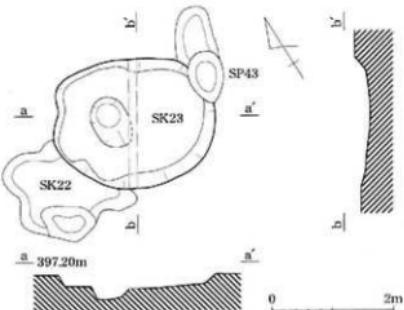
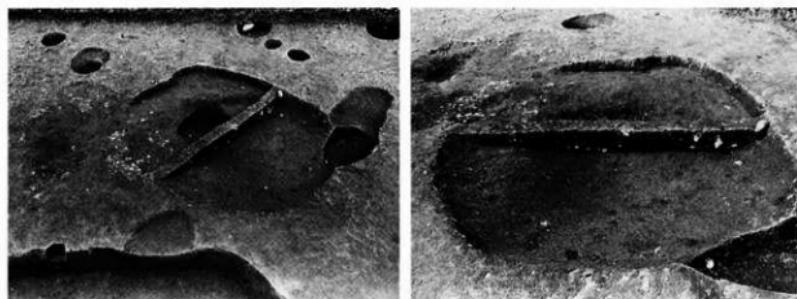


図26 SK 23実測図 (1:80)



SK 23遠景 (南から)

SK 23 (東から)

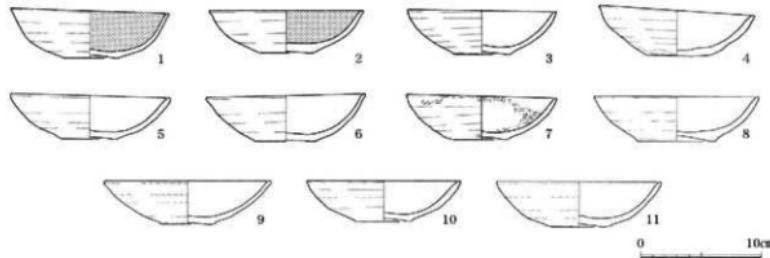


図27 SK 23出土遺物実測図 (1 : 4)

灰釉陶器については、いずれも椀あるいは皿とみられる破片が出土している。器形が窺える土器は黒色土器環（1・2）と土師器環（3～11）で、9世紀後半から10世紀前半の所産と考えられる。土師器環は口径が平均12.7cm、器高が平均3.6cmを測る。なお、7は内外面に煤が付着しており、実際に使用された痕跡をとどめている。

#### S K 25 (図10)

A区中央付近で検出した遺構である。弥生時代後期のS B 6を破壊して掘り込まれた不整形土坑で、規模は推定4.6×2.8m、検出面からの深さ最大で32cmを測る。遺構覆土は小石混じりの灰色粘質土であった。

出土遺物は1520gを測る。弥生時代後期の混入遺物が多いが、土器片から判別し得た器種には須恵器の环、緑釉陶器の碗とみられる破片があり、9世紀後半の様相を呈する。須恵器环の外側には「村」と思われる墨書きがある。また、緑釉碗片の内側には陰刻花文が施されている。



SK 25 (東から)



図28 SK 25出土遺物実測図 (1 : 4)

### 3 河川跡

#### S X 1・2 (図10)

A区東側で検出した。遺構覆土は黒色粘質土と黄灰砂質土が入り混じった状態で堆積していた。また、径10~20cm大の円礫を多く含んでいたことから、流水の痕跡を示すものと判断した。川底の確認には至らなかったが、調査区南壁では遺構検出面が東端に向かって落ち込んでいく状況が認められた。また、調査区の地形の傾斜から流水方向は北から南であったと推定できる。なお、S X 2は当初、別の掘り込みと考えたが、炭化物混じりの黒色粘質土をわずかに掘り下げるところ、S X 1と同様に粘質土と砂質土が入り混じった土砂が認められたため、一連の遺構と位置づけた。

出土遺物は9250gを測り、平安時代の土器片が多くみられる。土器片から判別し得た器種は、黒色土器の壺、土師器の壺・甕、須恵器の蓋・壺・甕である。また、綠釉陶器、灰釉陶器の破片も認められ、灰釉陶器には漆巻きの補修痕跡を有する破片が含まれていた。器形が窺える土器は図示した4点で、9世紀後半から10世紀前半の様相を呈する。



S X 1・2 挖削部分の状況（南から）

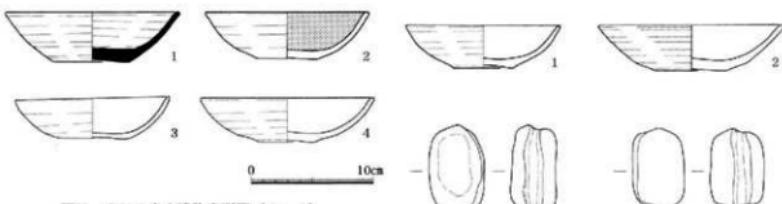


図29 S X 1出土遺物実測図 (1 : 4)



図30 包含層・検出面出土遺物実測図 (1 : 4)

### 4 包含層・検出面出土遺物

包含層・検出面から出土した遺物は、6970gを測る。弥生時代後期および平安時代の土器が大半を占める。土器片から判別し得た器種としては、黒色土器の壺、土師器の壺、須恵器の壺、綠釉陶器の段皿が挙げられる。綠釉段皿片は、内面に陰刻花文が施されている。器形が窺えるのは図示した土師器壺で、いずれも10世紀前半の様相を呈する。また、土製品が2点出土した。形状から錘と考えられる。

## IV 結 語

今回の発掘調査では、堅穴住居跡7軒、溝6条、土坑・小穴のほか、河川跡とみられる遺構を検出した。遺構の時期は、弥生時代後期と平安時代に比定することができ、該期の居住域であったことが明らかになった。旧建物による埋蔵文化財の破壊が認められたため、調査対象面積約985m<sup>2</sup>中、実質的な調査範囲は約450m<sup>2</sup>と制約を受けることとなったが、遺構の分布状況をはじめとする調査成果が得られた。

まず、特筆すべきは遺構の分布である。調査地の地形は北西から南東方向に傾斜する。調査区東端部はなだらかに落ち込んで窪地化する状況が窺え、河川跡と思われる遺構が展開することから、これより東側には居住域が広がっていないものと考えられる。また、遺構検出面の土質は、調査区西側では小石が混じる様子が観えた。堅穴住居跡は、調査区中央付近にまとまって認められ、東側の窪地と西側の小石混じりの土層を避けるように分布する。このことから、住居構築に際しては地形起伏や土質条件を考慮していた状況が看取できる。では、次に時代毎の様相を述べていくこととする。

弥生時代後期の遺構としては堅穴住居跡6軒、溝、土坑・小穴を確認した。出土遺物は後期中葉から後葉の様相を呈する。堅穴住居跡の主軸方向は不明瞭なものもあるが、地形の傾斜に沿った北西方向と考えられる。従来の集落研究では、主軸方向の一貫性を根拠として、同時期に存在した住居群とする考え方がある。今回の事例について、同じ視点に立てば、北西方向への傾きが小さい一群（SB3・4）と大きい一群（SB1・5・6）に分けられる。また、SB5がSB4よりも新しい住居跡であることをふまえれば、住居群が前者から後者に移行する状況が推測できる。なお、住居跡からは比較的多くの遺物が出土しており、SB3では、床面上から器形の窺える土器が認められた。また、SB4・5では覆土中から多量の土器片が出土しており、住居廃棄に伴って、土器を遺棄した様子が看取される。

ところで、調査地の北東200m程の距離には以前調査された本村東沖遺跡長野高校地点がある。ここでは該期の住居跡が40軒以上検出されており、今回の調査成果と合わせれば、延長300mを超える一連の集落範囲が展開しているものと想定できる。

平安時代の遺構は、堅穴住居跡1軒、溝、土坑・小穴のほか河川跡が認められ、9世紀後半から10世紀前半の所産と考えられる土器が出土した。検出できた住居跡が1軒のみであることから、居住域ではあるものの住居が密に分布する集落が展開するといった状況は窺えない。また、土坑・小穴の多くは柱穴と考えられ、その中には地形に沿って列をなすものが認められたが、明確な掘立柱建物跡の復元には至らなかった。なお、本村東沖遺跡長野高校地点でも該期の遺構は少なく、堅穴住居跡2軒・掘立柱建物跡2棟が確認された程度である。ただし、土器を一括廃棄したと考えられるSK23では、黒色土器や土師器、須恵器とともに縄輪陶器や灰輪陶器の破片が出土している。また、SK25では、「村」とみられる墨書きがある須恵器や陰刻花文が施された縄輪陶器の破片が出土しており、こうした状況を考慮すれば、当該地周辺に住居が密集した居住域が存在する可能性は否定できない。

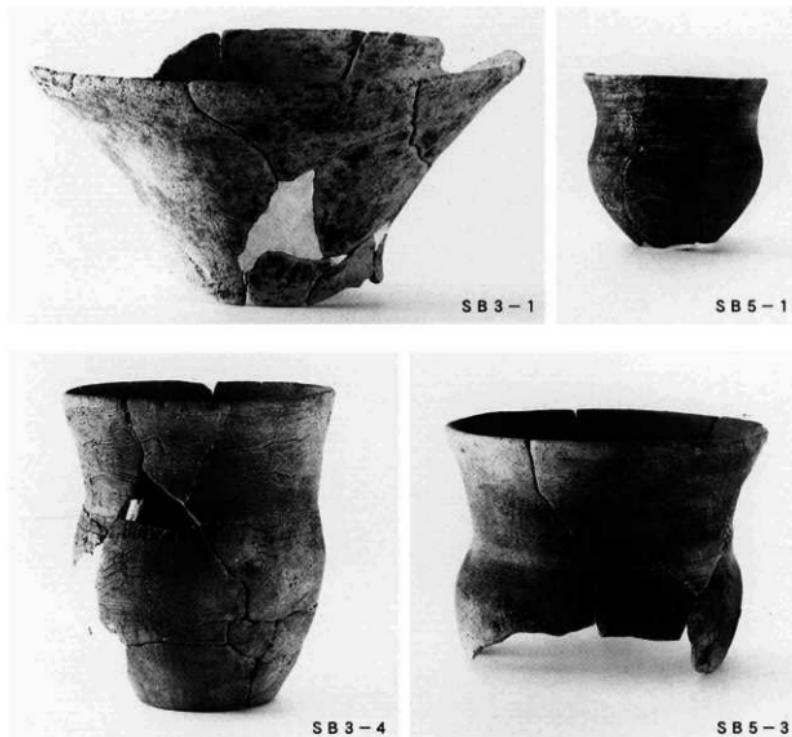
以上より、今回の調査地では弥生時代後期に集落が形成され、その後平安時代になって再び居住域が展開していた様子が窺える。なお、本村東沖遺跡長野高校地点で数多く確認された古墳時代中期から後期の住居跡は、当該地では検出できなかった。したがって、該期の集落範囲は、今回の調査地点までは広がっていないものと考えられる。

## 遺物觀察表

番号	出土位置	種類	器種	尺度 (cm)			色調	成形・調整・支撐等		
				口径	底面	底径		外側		内面
<b>S-B 3 (図14)</b>										
1	床面No.1	浮生土器	壺	29.0			にぶい黄緑	口縁～頸部：縦へら巻き。赤彩 腹部：褐色T字文	口縁～頸部：横へら巻き？。赤彩	
2	Pit3	浮生土器	壺	12.9			にぶい黄緑	口縁～肩上部：横へら巻き。赤彩	口縁～頸部：へら巻き。赤彩	裏上半部：へらなで
3	裏土	浮生土器	鉢		5.8		にぶい黄緑	横へら巻き。底中央に径1.4cmの穿孔がある	はけ	
4	床面No.2	浮生土器	壺	16.4			にぶい壺	口縁～頸部：褐色状文。腹部：複数状文 肩上半部：褐色状文。肩下半部：縦へら巻き	口縁～頸部：横へら巻き 腹部：赤へら巻き	
<b>S-B 4 (図16)</b>										
1	裏土	浮生土器	壺				にぶい壺	口縁～頸部：へら巻き。赤彩 腹部：褐色T字文	口縁～頸部：横へら巻き。赤彩	
2	裏土	浮生土器	壺	13.9			にぶい黄緑	口縁～頸部：褐色状文。腹部：複数状文 肩上半部：褐色状文。肩下半部：縦へら巻き	口縁～頸部：横へら巻き 腹部：赤へら巻き	
3	裏土	浮生土器	壺			9.0	淡黄	横へら巻き、横へら削り	横へら巻き。集げ底をとめる	
<b>S-B 5 (図18-19)</b>										
1	裏土	浮生土器	壺	10.5			にぶい黄緑	口縁～頸部：褐色状文。腹部：複数状文 肩上半部：褐色状文。肩下半部：縦へら巻き	へら巻き？	
2	裏土	浮生土器	壺	19.9			灰青緑	口縁～頸部：褐色状文。腹部：複数状文	横へら巻き	
3	裏土	浮生土器	壺	18.6			にぶい黄緑	口縁～頸部：褐色状文。腹部：複数状文 肩上半部：褐色状文	肩上半部：横なで	
4	裏土	浮生土器	壺	15.1	15.9	5.2	赤	口縁～頸部：褐色状文。腹部：複数状文 肩上半部：褐色状文。肩下半部：へら巻き	へら巻き？	
5	裏土	浮生土器	台付壺	14.7			にぶい黄緑	口縁～頸部：褐色状文。腹部：複数状文 肩上半部：褐色状文。肩下半部：へら巻き	四縁～肩上部：横へら巻き 肩下半部：へら巻き？	
6	裏土	浮生土器	壺	33.0			にぶい壺	口縁～頸部：褐色状文。腹部：複数状文 肩上半部：褐色状文	横なで	
7	裏土	浮生土器	壺	23.6	32.0	8.6	にぶい黄緑	口縁：山形突起4箇所。口縁～頸部：横へら巻き。赤彩 腹部：褐色T字文。颈部：横へら巻き。赤彩	口縁～頸部：横へら巻き。赤彩 腹部：褐色T字文。颈部：赤へら巻き	
8	裏土	浮生土器	壺			11.8	灰白	横および縦へら巻き		
9	裏土	浮生土器	壺				淡黄	口縁～頸部：横へら巻き。赤彩。腹部：褐色T字文	口縁～頸部：横へら巻き。赤彩	
10	裏土	浮生土器	壺				にぶい黄緑	口縁～頸部：横へら巻き。赤彩。腹部：褐色T字文	口縁～頸部：赤彩。茎～頸部：はけ	
11	裏土	浮生土器	高坏			10.3	にぶい壺	横へら巻き？。赤彩	頸部：はけ。肩部：横へら巻き？	
12	裏土	浮生土器	高坏			12.5	にぶい黄緑	横へら巻き。赤彩。三角透孔4箇所	頸部：はけ。肩部：横なで	
13	裏土	浮生土器	高坏	26.3	26.0	16.8	にぶい黄緑	口縁：山形突起4箇所。肩部：横へら巻き。赤彩 腹部～脚部：窓および横へら巻き。赤彩。肩部～脚部：横なで	肩部：横へら巻き？。赤彩	
14	裏土	浮生土器	鉢	19.3	10.65	7.1	にぶい黄緑	横へら巻き。赤彩	横へら巻き。赤彩	
<b>S-B 6 (図21)</b>										
1	裏土	石製品	幽裂片序					全長12.5cm、幅6.6cm、厚さ1.9cm、重量313gを測る闊平片刀石斧。石材は玄武岩輝石岩とみられる		
<b>S-K 5 (図23)</b>										
1	裏面	浮生土器	壺	15.8	16.15	6.6	にぶい黄緑	口縁～頸部：褐色状文。腹部：複数状文 肩上半部：褐色状文。肩下半部：横へら巻き	口縁～頸部：横へら巻き 腹部：はけ	
<b>S-B 2 (図25)</b>										
1	裏土	土師器	壺	12.9	3.65	5.5	淡黄褐	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
2	裏土	土師器	壺	13.2	3.75	5.6	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
<b>S-K 23 (図27)</b>										
1	裏土	黒色土器	壺	12.8	3.85	4.5	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	へら巻き。黒色板理	
2	裏土	黒色土器	壺	12.4	3.5	4.5	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	へら巻き。黒色板理	
3	裏土	土師器	壺	12.9	3.55	4.65	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
4	裏土	土師器	壺	12.7	3.7	4.9	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
5	裏土	土師器	壺	12.8	3.58	4.6	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
6	裏土	土師器	壺	12.8	3.75	5.0	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	へら巻き	
7	裏土	土師器	壺	12.7	3.6	4.3	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り。擦が付着する	なし。擦が付着する	
8	裏土	土師器	壺	13.4	3.7	6.5	灰灰	ろくろ。なし。底部回転軸切り	へら巻き	
9	裏土	土師器	壺	13.4	3.6	4.5	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
10	裏土	土師器	壺	12.4	3.37	4.5	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
11	裏土	土師器	壺	13.3	3.7	4.5	にぶい黄緑	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
<b>S-K 25 (図25)</b>										
1	裏土	消煮器	壺	12.8	3.82	5.5	灰白	ろくろ。なし。底部回転軸切り。『村』らしき墨書きがある	なし	
<b>S-X 1 (図29)</b>										
1	裏土	消煮器	壺	14.1	4.1	6.4	灰白	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
2	裏土	黑色土器	壺	13.2	3.85	5.0	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	へら巻き。黒色板理	
3	裏土	土師器	壺	12.3	3.3	5.7	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
4	裏土	土師器	壺	13.9	3.85	4.6	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
<b>包含層・被出器 (図30)</b>										
1	被出器	土師器	壺	12.4	3.55	4.8	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
2	被出器	土師器	壺	14.9	3.75	6.1	にぶい壺	ろくろ。なし。底部回転軸切り	なし	
3	包含層	土師器	壺?				浅黄緑	全長7.75cm、幅4.55cm、厚さ3.8cm、重量127g		
4	包含層	土師器	壺?				浅黄緑	全長6.5cm、幅4.2cm、厚さ4.45cm、重量119g		

遺構一覧表

遺構名	時期	遺構		遺物			備考
		焼跡・平面形	支脚	深度	粘土土質	実測値	
S B 1	弥生後期		N - 81° - W		460 g	1	
S B 2	平安	—×4.2m 楕丸長方形	N - 21° - W		1230 g	2	黒色坏、土跡坏・壞 圓底蓋・坏・壊・瓶體、灰陶片
S B 3	弥生後期	5.3×4.2m 楕丸長方形	N - 18° - W	柱穴・地床炉	4845 g	4	
S B 4	弥生後期	近椭4.8m	N - 7° - W		2520 g	3	壊、壊、高坏
S B 5	弥生後期	5.1×4.2m 楕丸長方形	N - 42° - W	柱穴・地床炉	16940 g	14	壊、壊、高坏、鉢
S B 6	弥生後期		N - 55° - W		200 g	1	
S B 7	弥生後期			地床炉			鐵鍛石を持つ
S K 5	弥生後期	80×52cm 楕円形			530 g	1	壊
S K 23	平安	2.5×2.1m 不整形			6160 g	11	黒色坏、土跡坏・壊、絲織片、灰陶片 圓底蓋・坏・壊・瓶體
S K 25	平安	4.8×2.8m 不整形			1520 g	1	圓底蓋・坏・絲織片
S X 1 - 2	平安				9250 g	4	黒色坏、土跡坏・壊、圓底蓋・坏・壊 絲織片、灰陶片



遺物写真(約1:3)



S B 5 - 6



S B 4 - 2



S B 5 - 4



S B 5 - 13



S B 5 - 5

遺物写真 (S B 5 - 6 は約 1 : 4、それ以外は約 1 : 3)



S B 5 - 7



S B 6 - 1



S B 5 - 14



S K 5 - 1



S K 23 - 1



S K 23 - 2

遺物写真 (S B 6 - 1は約2:3、S K 23 - 1・2は約1:2、それ以外は約1:3)



SK 23-3



SK 23-4



SK 23-5



SK 23-6



SK 23-7



SK 23-8



SK 25-1 墨書



SX 1-1



SX 1-2



SX 1-3

遺物写真 (SK 25-1は縮尺不同、それ以外は約1:2)

浅川扇状地遺跡群

かみ なが はた  
上 長 番 遺 跡

—長電建設上駒沢住宅地地点—

2005年10月

長野市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、長電建設株式会社による「長電建設上駒沢住宅地」造成事業に伴い、記録保存を目的として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 埋蔵文化財発掘調査の実施に関しては、長電建設株式会社と長野市との間で協定及び委託契約を締結し、平成16年度に発掘作業、平成17年度に整理及び報告書作成作業を実施したものであり、業務は長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が履行した。
- 3 発掘調査地籍は、長野市大字上駒沢字寺浦956他である。当初、浅川扇状地遺跡群内の未命名の遺跡として調査着手したものであるが、周知の埋蔵文化財包蔵地「上長畠遺跡」が所在する字「長畠」の隣接地にあたり、一連の遺跡立地に属するものと判断されたため、同遺跡の範囲内として取り扱うこととしたものである（Ⅱ章参照。）
- 4 発掘調査対象は、施工によって地下に影響が及ぶと判断された新設道路部分とし、試掘調査の結果から遺構存在が確認された200m<sup>2</sup>に関して調査を実施した。

## 目　　次

### 例言・目次

### 挿図目次

I 調査の経過.....	1	図1 周辺の地形図（1：10,000）
1 調査経過		図2 調査地の地形図（1：2,500）
2 調査体制		図3 調査位置図（1：1,000）
		図4 土層断面図
II 遺跡の位置と環境.....	4	図5 調査範囲全体図（1：200）
		図6 遺構測量図（1：80）
III 調査の成果.....	4	
1 調査方法		
2 遺構		
3 遺物		
4 まとめ		

# I 調査の経過

## 1 調査経過

長野市内で計画される宅地造成等の開発行為に関しては、都市計画法第32条の規定に基づく市との事前協議に際し、宅地開発指導要綱に準拠して埋蔵文化財保護に係る必要事項を行政指導し、工事に伴って埋蔵文化財が破壊される場合には発掘調査を実施して記録保存を図ることとしている。

当該発掘調査は、平成16年11月1日に中央地所有限会社から開発行為に関する協議申出のあった2,800m<sup>2</sup>10区画の宅地造成計画を起因事業とするものであり、発掘調査の実施に至るまでの協議等の経過は次のとおりである。

11月8日 開発行為に関する事前協議会開催。文化財保護法57条の2の規定に基づく届出について指導。埋蔵文化財包蔵状況を調査確認するための試掘調査の実施について協議。

12月1日・17日 市教委埋蔵文化財センターによる試掘確認調査の実施。遺構・遺物の包蔵を確認。記録保存のための発掘調査実施について協議。

平成17年1月31日 開発事業者変更。開発行為の事業主が中央地所有限会社から長電建設株式会社へ変更。

2月23日 長電建設株式会社から県教委あてに文化財保護法57条の2届出書が提出されるとともに、市教委あてに発掘調査依頼書が提出される。以降、発掘調査の実施に関して調整協議。

3月22日 長電建設株式会社と長野市との間で、平成16年度の埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。また、整理及び報告書作成作業を平成17年度に予定するため、併せて埋蔵文化財発掘調査実施に関する協定を締結。

平成16年度事業となった発掘作業は、委託契約締結後に直ちに着手し、作業の経過は次のとおりである。

3月22日 器機材搬入。重機による表土除去開始。

3月23・24日 表土除去を継続するとともに、遺構検出作業を実施。

3月28日 重機による表土除去作業を完了。

3月29・30日 作業員による遺構掘り下げ作業を実施。

3月31日 遺構掘り下げ作業を完了し、写真撮影及び測量（委託）を実施。機器材を撤収して現地作業を終了。

平成17年度事業に関しては、4月18日付けで委託契約を締結し、以降、整理作業を実施するなかで報告書作成に至ったものである。



作業風景（表土除去）



作業風景（遺構掘り下げ）

## 2 調査体制

発掘調査委託業務〔委託者〕 長電建設株式会社 取締役社長 工藤公照

発掘調査委託業務〔受託者〕 長野市 長野市長 鶴澤正一

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩勝秀
総括管理者	文化財課長	塙澤一郎 (H16) 北村真一郎 (H17)
統括責任者	局主幹兼埋蔵文化財センター所長	矢口忠良
庶務担当	係長	山岸恒雄 (H16) 宮沢和雄 (H17)
	職員	吉村久江 事務員 塚田容子
調査担当	係長	青木和明 (調査員)
	主査	飯島哲也 (H16) 風間栄一 小林和子 (H17)
	主事	小林和子 (H16) 宿野隆史 (H17)
	専門員	堀内健次 (H16) 清水竜太 遠藤恵美子 長瀬 出 (調査員) 山野井智子 石丸敦史 小出泰弘 森田利枝 宮沢浩司 山岸千晃 加藤拓也 (H17)

調査補助員 中嶋昭二郎 発掘作業員 池田昭子 内城たか子 奥村直美 塙澤孝徳 山田哲也

整理調査員 青木善子 池田寛子 多羅沢美恵子 烏羽徳子 中殿章子 武藤信子 矢口栄子

整理作業員 倉島敬子 小泉ひろ美 清水さゆり 関崎文子 富田景子 西尾千枝 三好明子 村松正子

遺構測量委託 株式会社写真測図研究所

長野市教育委員会埋蔵文化財センター担当による発掘調査の遂行においては、多くの方々のご支援をいただいている。発掘調査事業の委託者である長電建設株式会社関係各位におかれは、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力により、円滑に調査事業を実施できるようご配慮を賜った。深甚なる謝意を表するものである。



作業風景（遺構振り下げ）



作業風景（測量）

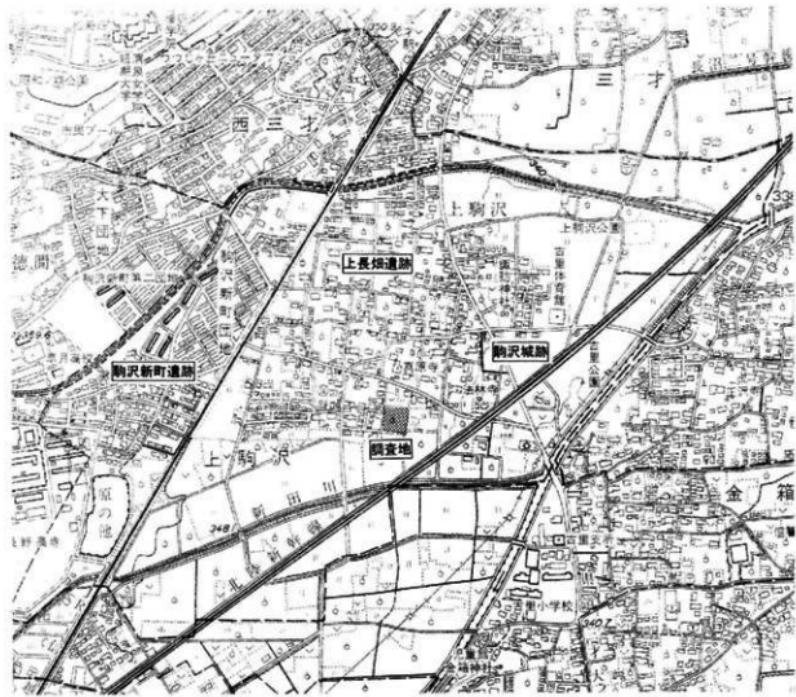


図1 周辺の地形図 (1:10,000)



図2 調査地の地形図 (1:2,500)



図3 調査位置図 (1:1,000)

## II 遺跡の位置と環境

飯綱山を水源とする浅川は、北側に並流する駒沢川と複合しながら長野盆地の東縁を東南方向に流下し、浅川扇状地を形成している。調査地が所在する上駒沢地区は、この浅川扇状地の末端部分にあたり、千曲川氾濫原との境界において駒沢川が浅川に合流する地点に接している。扇端部の湧水地帯にあることから、低湿な水田地帯が形成されているなかで、駒沢川と新田川（駒沢川の旧流路）に挟まれた中洲地帯が微高地を呈し、旧来からの上駒沢集落が営まれている。調査地点はこの上駒沢集落の南端に位置し、当該地点を境として南側が水田地帯として利用されているとおり、微高地から駒沢川旧流路の低地域へ移行する地形変換点に該当する。

周知の埋蔵文化財包蔵地である「上長畑遺跡」は字「長畑」に所在し、旧来の上駒沢集落の立地範囲には重なると目される。調査地点は字「寺裏」に所在するものの、字「長畑」の南側に隣接する位置関係から「上長畑遺跡」の南限を画する一角にあたると判断し、同遺跡範囲内として取り扱うこととしたものである。

なお、扇状地の末端に位置する上駒沢地区は、かつて浅川や駒沢川による氾濫禍をいく度も被ってきたことが影響してか、遺跡の所在確認や微地形の把握が比較的困難な地帯といえる。当遺跡以外の周知の埋蔵文化財包蔵地としては「駒沢新町遺跡（駒沢祭祀遺跡）」や「駒沢城跡」が知られているが、当遺跡も含めてその実態には判然としない部分が多く、埋没地形を含めての遺跡立地の検討が今後の課題となっている。

【参考文献】長野市教育委員会 1984 「石川条里的遺構・上駒沢遺跡」

タ 1985 「石川条里的遺構(3)・(付・上駒沢遺跡)」

タ 1996 「浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡・小島郷原遺跡群 中俣遺跡Ⅲ」

## III 調査の成果

### 1 調査方法

調査地の土層堆積は図4に示すとおり把握された。①は表土を構成する畑耕作土層。②は遺物包含層として認識した土層であるが、包含されている土器破片は僅少である。また、砂礫が比較的多く混入しており、過去の畑耕作に伴って連續的に攪拌されている状態にあると判断された。③は写真に見るとおり遺構掘り込みが観察された砂礫質の灰黄色土層であり、河川氾濫に伴う急激な堆積により形成された可能性が高いと判断された。④は地下水の影響によりグライト化した青灰色土層であり、上部の褐色系土層に比較して粘性に富む。

発掘調査においては、①及び②層を重機により除去した後、③層上面を遺構検出面と定め、人力により掘削をすすめた。また、③層が透水層となって地下水が湧出する状況にあったため、調査区の壁際に溝を巡らし、常時排水ポンプにより地下水を排出しながら調査をすすめた。

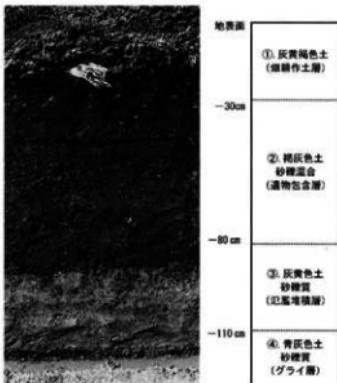


図4 土層断面図

2 遺構

調査により検出された遺構は、溝（S D）5本、土坑（S K）4基、小穴約60個を数える。このうち、遺物出土を認めた遺構のみに番号を付した（図5）。

（二）總

南北方向の2本(SD-1・2)と東西方向の4本(SD-3・4他)が確認され、それぞれが平行・直交する位置関係を見せている。SD-1~3は、検出面で確認する幅は最大でも1m、深さは15cm以内と浅く小規模な掘り込みによる。調査区の北端に位置するSD-4は、片側の肩部のみを検出したにとどまり、全形を確認するに及んでいないが、東西に走る幅2m以上の大型の溝と判断した。ただし、3箇所の試掘坑によって確認した掘り込みの傾斜は緩やかであり、底面の形状も判然としない。深さについては未確定といわざるを得ないが、包含される遺物の分布状態から判断して、30cm程度の浅い掘り込みであった可能性が高い。



#### 調査範囲全量（南から）



### 調査範囲全景（北から）

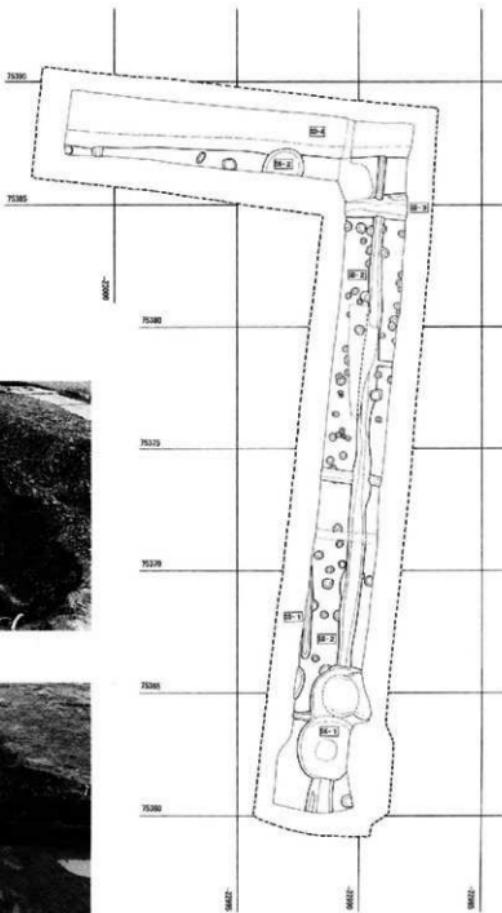


圖 5 腸音範圍全集圖 (1 : 200)

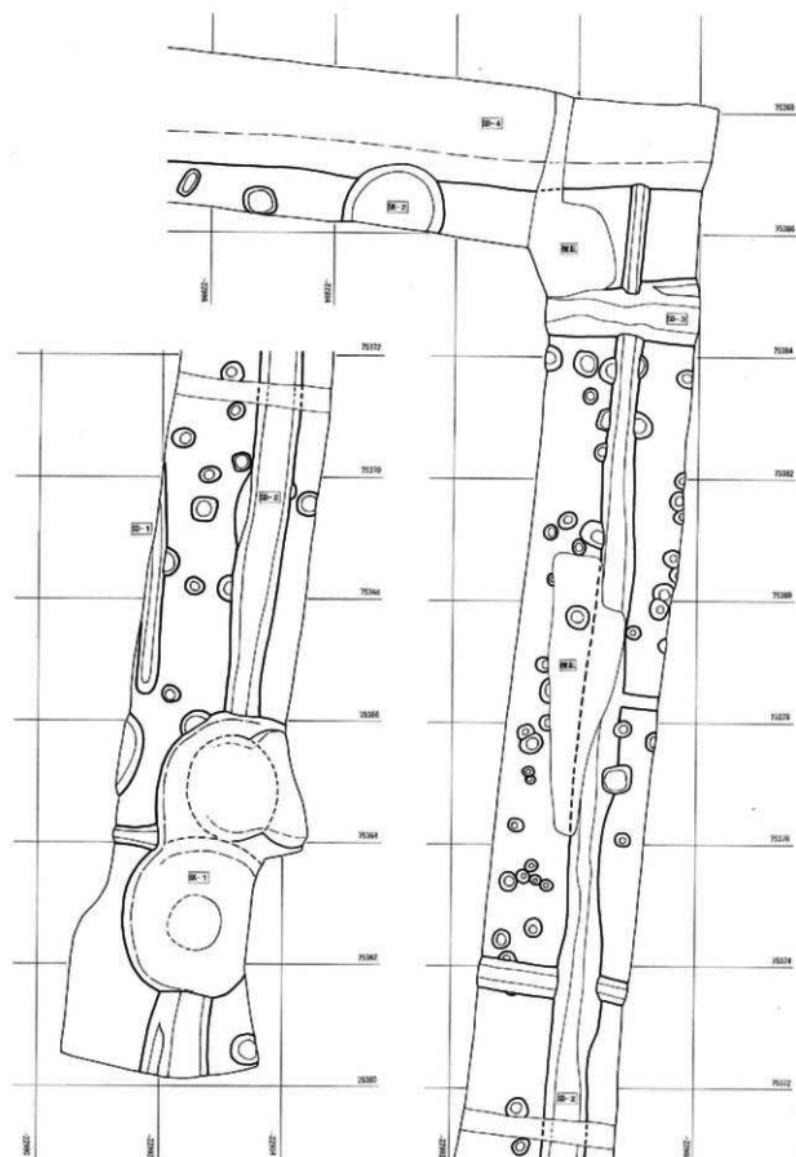


図6 遺構測量図(1:80)

## (2) 土坑

S K - 1 は、検出当初には長さ4.5m、幅2m以上の楕円形の掘り込みとして確認したが、掘り下げの過程で2~3基の土坑が複合したものであることが判明した。それぞれの切り合い関係は不明であるが、互いに接して位置することから、連続的に掘り込まれた一連の遺構である可能性が高い。半蔵して底面まで掘り下げを実施した南側の一基については、断面形態が稍鉢形、検出面からの深さは55cmを測り、上面の平面形は直径2.2m程度の円形であったと想定される。S K - 2 は直径1.7mの円形を呈し、深さは40cm以上を測るが、底面までは未確認である。なお、S K - 1 は溝 (S D - 2) と重複する位置にあるが、溝が埋没した後に新たに掘り込まれたものと判断した。

## (3) 小穴

径20~40cm程度の小穴が約60個検出されたが、その配列に規則性を認めるには至っていない。



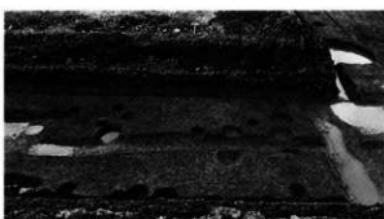
S D - 4 検出状態（西から）



S D - 4 掘り下げ状態（西から）



S K - 1 検出状態（東から）



S D - 2 北側（東から）



S K - 1 半蔵状態（南から）



S D - 2 南側（東から）

### 3 遺物

出土した遺物は土器・陶磁器の破片であり、総数は36点を数える。うち半数以上が中世の所産であると判定され、全ての遺構においてその存在を確認できる。このことから、当該調査において検出した遺構の全ては、中世段階の構築と判断することが妥当となる。また、遺構が掘り込まれている灰黄色土層（氾濫堆積層）の形成も該期にになると判断される。なお、中世陶磁器は白磁の細破片1点を除いて、珠洲系の壺・甕・摺鉢破片であり、中世土器はカワラケと内耳鍋の破片である。その他の土器については、小破片のため判定が困難なものも多いが、古墳時代から平安時代に属するものが確認され遺跡内に同期の遺構が存在している可能性が示唆される。

出土遺物一覧表

種別	遺構名 番号	出土数 (個)	内訳(時期・種別)					
			古墳・土器	平安・土器	中世・磁器	中世・陶器	中世・土器	不明
溝	SD-1	3			1		2	
	SD-2	2					1	1
	SD-3	2	1				1	
土坑	SD-4	20		5		5	6	4
	SK-1	5	2			1	2	
	SK-2	2					1	1
検出面		2				1		1
合計		36	3	5	1	7	13	7

### 4まとめ

今回の調査において発見された溝・土坑などの遺構については、出土遺物の様相から中世段階に構築されたものと判断されることとなった。南北と東西方向に平行・直交しながら配列される溝の分布状態や、窓あるいは井戸を思わせる土坑の存在、さらには出土遺物が僅少であるなどの点から類推し、農業生産に関連する施設であった可能性が考えられるところである。低湿地への地形変換点にあたる当該地点の立地を考慮すれば、集落遺跡本体の外縁部における土地利用の姿を示しているとみることもできる。

扇状地の末端部に位置する上駒沢地区では、浅川とその支流による土砂の運搬堆積が活発であり、近年の河川改修以前には典型的な天井川が形成されていた。近代において度々の決壟と氾濫が繰り返されてきたことが記録に残されており、築堤以前の古代・中世段階においては、それら河川の流れがさらに奔放であったことが想像に難くない。今回の調査において認められた氾濫堆積の痕跡は、時として劣悪となるこの環境の中で先人の営みが積み重ねられてきたことを示す証であり、上駒沢地区の歴史を知る上での一資料となるものである。

なお、上駒沢地区においては、平成6年度に西友古里店建設に伴い、当遺跡の東端に位置する駒沢城跡の発掘調査が実施され、中世の溝・土坑・小穴の分布が確認され、地区一帯に中世段階の居住域が展開しているらしいことが明らかとなっている。さらに同調査では、平安時代集落の存在や、古墳時代・弥生時代の遺物出土も確認されている。また、昭和58・59年度には、上駒沢地区団体営圃場整備事業に伴い、当遺跡の南側一帯において試掘確認調査が実施され、弥生時代の遺物包含層が散発的に存在しているらしいことが確認されている。当遺跡をめぐる歴史的な考究は今後の課題であり、さらに調査の蓄積を待たなければならないが、中世を遡る以前からの連續とした歴史の繋がりが、未だ埋もれたままにあることも忘れてはならない。

報告書抄録

ふりがな	いしかわじょうりいせき あさかわせんじょううちいせきぐん ほんむらひがしおきいせき・かみながはたいせき
書名	石川条里遺跡(II)・浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡・浅川扇状地遺跡群 上長畠遺跡
副書名	特別収蔵品老人ホーム桜荘地點・サーバス上松地點・長電建設上駒住住宅地地點
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第 III 集
編著者名	青木和明・風間栄一・小出泰弘・森田利枝
編集機関	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2005(平成17)年10月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因				
		市町村	遺跡番号									
いじきかこりや 石川条里 遺跡	長野県長野市 篠ノ井二ツ柳字 大当1535-1	20201	E-●	36°34'2"~ 36°34'2"	138°8'1"~ 138°8'1"	20050113 20050121	90m <sup>2</sup>	その他 の建物				
ほんじゆうとうじゆ 本村東沖 遺跡	長野県長野市 上松1丁目588の2 あさごんじゆうとうみさき	20201	A-093	36°40'5"~ 36°40'5"	138°11'54"~ 138°11'54"	20050303 20050331	450m <sup>2</sup>	集合住宅				
かみながはな 上 長 煙 いせき 遺跡	長野県長野市 大字上駒澤字 寺浦956他	20201	A-093	36°40'44"~ 36°40'44"	138°14'33"~ 138°14'33"	20050322 20050331	200m <sup>2</sup>	宅地造成				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項					
石川条里 遺跡	田畠	平安時代	水田 畦畔		なし							
本村東沖 遺跡	集落	弥生後期	竪穴住居	6	弥生土器・扁平片刃石斧							
		平安時代	竪穴住居 溝・土坑・小穴 河川跡	1	土師器・須恵器 縄釉陶器・灰釉陶器							
上長煙 遺跡	集落	中世	溝 土坑	5 4	陶磁器・土器							
要 約	石川条里遺跡		千曲川の後背湿地より、洪水砂による埋没水田を検出した。遺物の出土はないが、これまでの調査成果に照合し、平安時代水田と判断される。また、南北方向の大畦畔を検出し、想定される条里区画に合致することが確認された。									
	本村東沖遺跡		調査地は浅川扇状地扇尖部の西端付近に位置し、北西から南東方向に傾斜する地形を呈する。弥生時代後期および平安時代の住居跡が見つかり、該期の居住域であったことが明らかになった。弥生時代後期の住居跡は近距離にある本村東沖遺跡長野高校地点でも数多く確認されており、延長300mを越える一連の集落範囲が想定できる。									
	上長煙遺跡		調査地点は浅川扇状地の末端部にあり、千曲川氾濫原との境界部分に位置する。居住域としての遺跡の線辺部に該当するものと思われ、検出された溝及び土坑は、農業関連施設であった可能性が考えられる。									

長野市の埋蔵文化財第111集

**石川条里遺跡(1)**

浅川扇状地遺跡群  
本村東沖遺跡(3)

浅川扇状地遺跡群  
**上長畑遺跡**

平成17年10月26日 印刷  
平成17年10月31日 発行

編集 長野市教育委員会  
発行 文化財課埋蔵文化財センター  
印刷 奥山印刷工業株式会社